

# 竹の曲

た  
け

は  
や  
し

令和5年1月

太宰府市教育委員会

## 例 言

した箇所がある。

1 本書は、福岡県太宰府市の竹の曲保存会が太宰府天満宮（本文中では天満宮と記す）の9月に催される神幸行事（県指定無形民俗文化財）において奉納される「竹の曲（たけのはやし）」（県指定無形民俗文化財）に関する記録の報告書である。

2 本調査は太宰府市が（有）システム・レコに委託し実施した。

3 本調査に係る写真・動画の撮影は（有）システム・レコの外、太宰府市教育委員会文化財課の山村信榮、遠藤茜、木村純也がおこない、報告書の執筆は山村が、動画及び報告書の編集はシステム・レコがおこなつた。

4 本書および動画の監修は森弘子氏（福岡県文化財保護審議委員）に依頼し、荒川真希氏（福岡市文化財保護活用課）のご協力を得た。

5 動画の撮影や聞き取り調査については、太宰府天満宮および福岡県指定無形民俗文化財「竹の曲」保存会（以下、竹の曲保存会）のご協力を得て実施した。

6 本文中の用語で民俗芸能の継承者や行事の関係者が使い習わす用語については、「お御供上（ごくあ）げ」などかぎ括弧書きで表記

7 本書に使用した画像の一部について太宰府天満宮、竹の曲保存会、福岡市博物館、木村敏美氏より提供・許可を受けた。

## 目次

第1章 はじめに	1頁	第1節 太宰府天満宮神幸式の供奉	14頁
(1) 9月22日金曜日 「お下り」		(1) 9月23日土曜日 「お上り」	
(2) 9月23日土曜日 「お上り」		第2節 太宰府天満宮秋思祭	
第2章 保護の履歴	1頁	第3節 行事の練習	
第3章 「竹の曲」の歴史	1頁	第6章 竹の曲の構成要素－演者および道具と装束－	
第1節 室町期	5頁	第1節 竹の曲の構成員	
第2節 江戸期		第2節 道具と装束	
第3節 近現代		(1) 締太鼓	
第4節 竹の曲の歴史的変遷		(2) 横笛	
第4章 六座について		(3) ささら	
第1節 文書資料		(4) 扇	
(1) 六座の覚(平井文書)		(5) 狩衣、鳥帽子、ゴザ袴、侍鳥帽子	
(2) 六座目録(六座中の船越家所蔵)		(6) 面	
(3) 六座の面 箱書		第7章 奏法と舞	
(4) 竹の曲 歌詞		第1節 「竹のはやし」の曲について	
第2節 六座と竹の曲		第2節 締太鼓と横笛	
第3節 美麗役梅津家と竹のはやし		第3節 舞	
第4節 竹の曲保存会の活動歴		(1) 「ささらの舞」	
第5章 令和4(2022)年の「竹の曲」の記録	12頁	(2) 「扇の舞」	
		第4節 謡「竹の曲」	

参考文献  
第8章 まとめ

24頁  
23頁

## 第1章 はじめに

「竹の曲」は福岡県無形民俗文化財に指定された民俗芸能で、太宰府市の竹の曲保存会により継承されている。

大宰権帥大江匡房が始めた天満宮安樂寺（現在の太宰府天満宮）の神幸式大祭（以下、神幸祭）（図版図1）に田楽の一座が奉仕するようになったのが始まりと伝えられ、中世太宰府の五条に居を構え商工業に従事した「六座」（米屋座・鑄物屋座・鍛冶屋座・染物屋座・小間物屋座・相物屋座）（図版図2）の子孫とその関係者が代々伝える芸能で、中世の田楽を今に伝えるものとされる。現在の演目は「ささら舞」と「扇舞」で舞手の稚兒（男児）1名と締太鼓・笛（壯年老年男子8名ほど）で構成され、9月に行われる太宰府天満宮（以下、天満宮）の神幸行事の祭中に演じられている。近年では天満宮が大宰府政跡で10月に毎年おこなう秋思祭や市の公的行事などでも上演している。神幸祭は祭神を載せた神輿が天満宮から約1.5Km離れた頓宮である榎社の間を2日かけて往復する行事で、竹の曲の一行きは行きの「お下（くだ）り」、帰りの「お上（のぼ）り」に際して神輿の隊列に供奉をし、神輿の前の位置で「道楽（みちがく）」を奏し、帰路の「お上り」では浮殿でおこなわれる儀礼に際して「お御供（ごく）あげ」という曲で笛と太鼓を奏し、神輿が本殿還御した後に神前にて「ささらの舞（まい）」、次いで「扇（おおぎ）の舞（まい）」を奉納している。

## 第2章 保護の履歴

竹の曲は学術的に価値が認められ、以下に示すように行政により選定、指定された経緯がある。

昭和27（1952）年10月29日 国の助成すべき無形文化財に選定

昭和35（1960）年4月12日 福岡県無形文化財指定（昭和29（1954）年的重要民俗資料指定制度の創設による選定消失に伴う措置か）

昭和51（1976）年4月24日 福岡県無形民俗文化財に再指定（昭和50年法改正に伴う措置）

## 第3章 「竹の曲」の歴史

### 第1節 室町時代

#### ○『天満宮社役年中行事記』 室町時代

「御跡にびれいこれは石はしより幸の橋造なり」

「別當官、公文其外宿々三戻り申候、もんにんハ右之着座所ニ居申候

ニひれいもんにんの前にて竹の林を舞申候 は於神殿歌舞ス、

其後別當官、公文へハ家々に参ひ申候相勤候

※棒線の文字は墨の塗消し部分。『神道体系』神社編四十八太宰府記載の翻刻に原史料を参照し加筆修正

『天満宮社役年中行事』は太宰府天満宮が所有する室町末期に成立したと考えられる史料で天満宮における神幸祭の旧暦8月24日の次第について述べており、すでに室町期には「びれい」により神幸祭の神輿還御後に「竹の林」が奉納されていたことが知られる。また、『安樂寺天満宮年中行事記』によれば、その前日の神幸の供奉の様子について、境内の「石橋」から榎社の手前の「幸の橋」まで「びれい」が神輿の後に供奉している様が記録されている。

## 第2節 江戸～明治初期

○『筑陽記』 御笠之部 宝永三（一七〇五）年 安見有定

「二十四日、戌乃時、本社に返し奉ル也。此時竹の舞と云舞樂あり。当地乃猿樂是を勉む。」

○『筑前国続風土記』 宝永六（一七〇九）年 貝原益軒

「二十四日の夜戌乃時、もとのことく御庵にかへし入れ奉る。入御の時も出御の時の如く、燈をけして音樂あり。其後五別当三綱凡八人、御幣をささぐ。其後竹の舞あり。竹の舞は、いにしへの田樂の餘風にやといふ。一人にてまふ。猿樂のうたひのことくなるうたひ物也。凡此時の儀式、よ所の祭のよそほひにすぐれ、いとしづかにして嚴重なれば、誰も見まほしき事におもへり。」

○『太宰府天満宮故実』 貞享元（一七〇九）年 貝原益軒

○『一山社用旧格雜記』 天保一五（一八四四）年

「廟院の南に頓宮あり。神輿を其内にやすめて神事を其まえに行ふ。翌日宴終りて、夜に入て才子ひきて宴席をのぶ。是を祭の竟宴と云也。」

○『筑前国続風土記附録』 寛政一〇（一七九八）年 加藤一純 鷹取周成

「浮殿に入御ありて後、日別の神食を奉る。竹のはやしあり。」

「正殿にかへり入られ玉ひし後、五別當・三綱奉幣の式あり。その次に竹のはやしあり。」

○『太宰管内志』 天保一二（一八四二）年 伊藤常足

「廟院の南に頓宮あり、神輿をそこに休めて神事を其前に行ふ。翌日宴を張て、夜に入て才子を引て宴序をのぶ。是を祭の竟宴と云なり。」

（貝原翁曰）安樂寺八月の祭の事（中略）廿四日の夕は樂を奏し、また別當等八人竹ノまひをまふ、竹ノ舞といふは古の田樂の餘風なるよしなり。」

○『筑前名所図会』 文政四年（一八二二） 奥村玉蘭

「廟院の南に頓宮あり。神輿を其内に休めて神事を其前に行ふ。翌日になり夜に入て才子ひきて宴席をのぶ。（中略）此祭今に續きて神幸行列嚴重なり。委しき事ハ略之。」

※筑紫豊「神幸祭と「竹の曲」」（菅原道真と太宰府天満宮）1975年太宰府天満宮文化研究所編）より

「（一四日）同夜 競宴竹之ハヤシ別當中 上座坊迄寺江来ル」

○『福岡県地理全誌』 明治一五（一八八二）年

「浮殿にて日別の神食を奉る。竹ノ舞あり。竹ノ舞は古の田楽の餘風なりと云。一人にて舞ふ。猿楽の謡の如くなるものなり。此業をなす者宰府にありて六座と云。」

「此夜戌の時元の如く本社に還入奉る。宮司は供奉し別当は先馳す。此時も燈を消して音楽あり。其後五別当三綱凡八人御幣を捧ぐ。其後竹ノ舞あり。」

貝原益軒が17世紀末から18世紀初頭に編纂した『筑前国続風土記』には神幸行事の本殿還御の後に「竹の舞」の奉納が記述され、舞は古の田楽風で一人で舞い、謡は猿楽のようであると評され、この時の儀式（神幸祭）は他所の祭に対してもうけ、誰もが見たくなるような祭事であると評されている。同時期の安見有定の『筑陽記』には「当地乃猿樂」が「竹の舞」を務めたと記されている。また、貞享元（1709）年の貝原益軒の『太宰府天満宮故実』には廟院の南にある頓宮前で行われた「宴」では、終りに「才子」が宴席をにぎわす「竟宴」がおこなわれたとあり、本殿への神輿の還御の前に頓宮（現在では浮殿）にて祭事と芸事が行われていたことを記している。

次の『筑前国続風土記附録』では、浮殿において「竹のはやし」の奉納と変わっている。続いて伊藤常足の『太宰管内志』（天保12（1841）年では「八月祭竹ノまひ」として貝原益軒の記述を引用し、委細は略すとされているが、挿絵にて神幸祭の隊列に「ささら」が供奉する様子が描かれている（後述）。太宰府天満宮所蔵の『一山社用旧格雜記』の神幸式の帰路の浮殿での記事には、「四日夜の「竟宴」」の後に「竹之ハヤシ」が別当家や上座坊までまわった様子が記載される。各家々の前で門付けの演奏をおこなつたものかと思われる。『福岡県地理全誌』は明治一五年の刊行であるが、江戸期の情報を含んで編纂されている。注目されるのは「竹ノ舞」の主体者が「六座」であることが明記されていることである。

江戸時代の後半には絵画資料がある。奥村玉蘭の文政4（1821）年『筑前名所図会』卷四にある挿図「天満宮神幸の図」（図版60）には太宰府天満宮の御神祭の隊列を描いた墨書きの挿絵で、神輿の後ろの神馬に続いて簾築（1名）、横笛（2名）、火焰太鼓（打ち手1名）、さらさら4名が描かれている。さらさらを持つ4人は丈の短い袴に黒い武者鳥帽子戴き、他の楽人は指貫袴を履き雅楽の鳥兜を被つており様相の違いが見て取れる。先を歩く一団は神社の伶人の可能性があり、さらさらの4人は竹の曲の一団と考えられる。

『御神幸絵巻』（太宰府天満宮所蔵）は太宰府天満宮の御神祭の隊列を描いた絵画で、嘉永本（図版図61）と元治本（図版図62）が伝えられる。嘉永本（1848～1854年）では神輿のすぐ後ろに

火鉢太鼓、（打ち手1名）、ささら（2名）、横笛（3名）、簫（1名）、簞篥（1名）、が描かれている。元治本（1864～1865年）では神輿の後ろの位置に横笛（3名）、締太鼓（2名）、ささら（1名）があり、それに続き火鉢太鼓（打ち手1名、担い手4名）、笙（3名）、簞篥（2名）、横笛（2名）が描かれている。火鉢太鼓と簞篥の存在から後の一団は神社の伶人と思われ、ささらを含む前の一団は竹の曲の一団と考えられる。嘉永本は隊列が入り乱れている様であるのに対し、元治本では楽団が火炎太鼓を境に前後で整然と描き分けられている。神幸絵巻の奥書に安政5（1793）年の事として「御社式序等者別段ニ取成、御祭礼式序も夫々相改ニ相成候」とあり、当時の安樂寺天満宮の別當であった法印（大鳥居）信全により隊列の順や装束も改めたことが知られる。名所図会や神幸絵巻の嘉永本では、神社の伶人とササラを持つた一団との関係性があいまいである（伶人の集団にササラのみが含まれるよう見える）が、元治本の竹の曲とおぼしき一団が、伶人と切り離され今に通じる装束と締太鼓、横笛、さららの楽器の構成で描かれており、ここに至つて現在の神幸式に供奉する形が出来上がったのではないかと考えられる。太鼓が伶人の火炎太鼓から独立したため、現在の道中で演奏される「道楽」はこの時から演奏されるようになつたものかも知れない。

### 第3節 近現代

高原謙次郎、江島茂逸著の『太宰府史鑑』明治36（1903）年では、「廿四日還幸式終りて。竹の曲を奏す。村民の内六座之を勤

む。今猶存す」と記している。筑紫豊著『神幸祭と「竹の曲」について』に記載されている昭和35（1960）年10月の福岡県文化財専門委員の天満宮神幸祭奉仕についての氏子古老からの聞書によれば「一六 お上り 忌垣の鳥居お小休み、浮殿入御（二十三日）。一七 二十四日午后三時、日供、おぐくうあげ（竹の曲）。午后八時おうつり、本殿着御。お祭の最後に、竹の曲。」とされている。  
明治維新の神仏分離で神幸祭も仏教色が後退した形に改められたが、六座の浮殿、本殿前での奉納は継続したことが記録でも確認できる。

### 第4節 竹の曲の歴史的変遷

4

このような記録から、竹のはやしは室町期には成立しており、「びれい」により演じられ、天満宮の神幸祭の隊列にも供奉していたことが知られる。それは江戸期を通じて奉納されていた。その段階では舞は古の田楽風で、謡いは猿楽の要素がある芸能であり、天満宮の神幸祭に際しては神輿の本殿還御の後に、静かにして行事を締めくくる厳重な奉納演目としておこなわれていたことが知られる。また、「お上り」の頓宮（浮殿）でおこなわれていた「竟宴（きょうえん）」での「才子」による上演に代わって天保年間には竹の曲が演じられるようになり、近代には確実に六座による演者の「竹の曲」が、浮殿において「お御供上げ」として演奏がなされるようになった。室町から江戸期には、行事の後に主だった社家の家々まで回つて門付けをおこなつていたと思われる。「びれい」との関係は史料上では明

確でないが、神幸の隊列にも幕末期には確實に供奉するようになつたものと解される。「びれい」と「六座」の交代の時期は歌舞においては「当地の猿樂」の記載から江戸前期以前とみられ、神幸祭の供奉については、江戸後期の元治年間には今に近い形になつていたと思われる。

昭和27（1952）年の資料『無形文化財指定 太宰府天満宮・竹曲』によれば、かつては六座に竹の曲に関する古記録があつたが明治14、5年頃の新町の火災で焼失し、子細な来歴が失われたとされ、今回の調査でも大正5年と大正15年の墨書のある衣装箱を見ることはできたが、昭和以前（現在の保存会会員の祖父世代以前）の記録類を見つけることはできなかつた。聞き取り調査においても、現在の保存会会員の祖父世代である昭和初期以前の事績の詳細はわからなかつた。

#### 第4章 六座について

##### 第1節 文書資料

竹の曲を演じてきた六座は江戸期のものと思われる次の文書や絵画で概要が知られる。

- (1) 六座の覚（平井文書）※『太宰府・太宰府天満宮資料卷十七』より  
筑前太宰府六座之覚
- 船塚正空  
山門正禪

染物座	米屋座	鑄物座	平井輿作	同四郎右衛門	田尻彌次郎	吉塙藤兵衛	泉四郎兵衛	佐藤甚右衛門	同新左衛門	鎌盛善左衛門	丹波藤左衛門	齊藤刑部
古川新九郎				花房善四郎								船越七郎治
				花房藤四郎								同甚四郎
船越清右衛門												古川小三郎
												安武三郎兵衛
												同四郎

相物座

古川内藏之助

細物座

安武源右衛門

鍛冶屋座

齊藤左馬助

文禄元辰年

六月朔日

大鳥居信岩殿

(2) 六座目録 ※『わが郷土太宰府』1983年山内興隆(船越家所蔵文書)

一 惣て六座の根元、米屋・金屋・小間物屋・あいもの屋・紺屋・鍛治屋、此の六人の頭にて、市場を始る。米屋は石物の頭・金屋白金物の頭・小間物はれんじやくの頭・あいものは肴壱巻・紺屋は染物・鍛治屋は切物の根元。本当所住人故市繁昌の砌、只今觀世音寺に有之祇園、古は宰府の内にて六月十五日市はんじょうのため、能五番仕上、其所仕近引穂に天満宮に御能仕上、御両社相勤申候。其の後乱国の時分は止居候事数多有之、然ば右の六座の者共余力も有之に付、銘々の子供に能を致させ来候。びれい役には無之に付、敷さんば無御座候。然ば其節為若身分と、觀世音寺の代官より、米參俵、大鳥居殿より米五斗、小鳥居殿より三斗、御造當より米五俵、古より出来候。右六座の者共、能久敷中絶仕候へ共、市場立申候故、文禄元年より、又存立仕来候。然ば如水公様より、御入国の時分、神社仏閣謂有

所、調有煮共御尋被遊候。其刻、宰府の市の儀御尋ね為成、右六座の者共委細に申上候。其の已後、宰府之御隠居致為遊候節、六座の者共被召出、御目見仕り、名有者に候中、鑓壱筋宛六人に拝領仕候。能の儀は嶋原陣此方止居候。如水公より御尋ねの時は

一一新九郎、其の子新三郎、夫より右左衛門、夫より新九郎、右米屋の家なり。古川氏

二 金屋は与作、後に藤右衛門、其子弥平次、夫より藤三郎。平井氏

三 小間物屋は、深右衛門、其子善五郎、夫ヨリ惣右衛門、夫ヨリ惣

七。安武氏

四 あい物屋は、内蔵介、夫ヨリ利助、其子忠兵衛、夫ヨリ利介。吉

塚氏

五 紺屋は、清右衛門、夫ヨリ藤兵衛、其子藤四郎、それヨリ藤九郎。

舟塚氏

六 鍛冶屋は佐馬之介、夫ヨリ清右衛門、其子源右衛門、夫ヨリ市介。斎藤氏

右の外組子

一 米屋の分、古川小三郎四郎右衛門ヨリ八兵衛氏跡絶る。新九郎のためにはいとこ孫四郎は、新九郎式番目、其子十右衛門、其子孫四郎。

二 金屋無分。

三 小間物屋の分、安武源右衛門、三郎兵衛、伝右衛門。

四 あいもの屋は無分。

五 かじや、清右衛門是然れ共古よりのやしきなれば弟にゆづる。

六 紺屋は舟越正定・清右衛門兄弟。正定跡絶て来光寺立

右天明元年丑六月改候

右者古箱之通写置者也

明治元年改

(3) 六座の面 箱書 ※太宰府天満宮所蔵 図版図59

女面 貳ツ

坊主面 壱ツ

翁面 壱ツ

熊坂面 壱ツ

メ五面

寶曆十四年六月朔日二改候

翁面二面

右者秋月甲斐様依御望差上候

元禄十二年卯六月朔日

ぎおん講 銀九包三分

孫四郎預り跡絶ル也

連中

古川長兵衛

吉塚九兵衛

長谷清市

古川新蔵

船越甚四郎

安武宗次郎

斎藤喜左衛門

※棒線の文字は墨の塗消し部分

所有

斎藤慶三郎

船越壽人

安武宗兵衛

吉塚藤九郎

（楽入一同）

(4) 竹の曲 歌詞  
(稚兒独唱)

しゃくそんせつぼう  
釈尊説法の古は  
いにしえ

竹の林に寺を建て、晋の七賢といひし人

竹林セイシ、シスマンセイシ 竹を囃せし諸人の、尚世々は経れど  
はや  
しおけん  
いつとなく  
なお

（稚兒独唱）

申せども定めず眺めつつ

(楽人一同)

あられ  
霰たまらぬ玉笛に、小枝洩りくる月影の

葉に置く露に移ろいて、露を磨ける光こそ千秋万歳と覚えたり

糸竹の調妙にして、万の声をととのえる

(稚児独唱)

実にも芽出度く覺ゆるは

(楽人一同)

何よりも何よりも、あまねく諸人に、イチグ南北に、呉竹を植え置きて、

眺めばや、眺めばや、ヘイヤの笛により簫により、

我も人もおしなめ、大平樂を吹きならし

喜びは是れをして思う人により、竹のいつも緑の色映えて、千代を

重ねて竹の曲

## 第2節 六座と竹の曲

これらの江戸期の文書や絵画から、六座は太宰府を代表する商業の各業種別代表六軒で、鋳物座は平井家、米屋座は古川家、染物座は船塚(越)家、相物座は古川家、細物座は安武家、鍛冶屋座は斎藤家で、「右の外組子」とあり、座の頭を務めた六家以外に組を構成する商工業の家々があつた。六座はもともと市町(五条)内にあつた祇園社に毎年旧暦6月15日には(祇園祭のことか)能五番を奉納しており、式三番には演技指導の美麗役があたつていた。六座が伝えてきた女面、坊主面、翁面、熊坂面(図版図58)はその事実を示している(式三番は美麗役によるものか)。演じるに当り観世音寺代官や天満宮の大鳥居家(現宮司家)、小鳥居家(現権宮司家)御造営から資金として米が提供されており、天満宮にも能を奉納していた。戦国の戦乱でしばらくは行事の催行が困難となつたが、六座の者には余力があつたためそれぞの子どもに能をさせていた。そして文禄元(1592)年には市が再興された。締太鼓の修理も同年におこなわれており、町衆による祭礼も復興され「竹の曲」の六座による上演もこの頃から本格的におこなわれたものかも知れない。

能の上演については観世音寺が所有する江戸後期の『太宰府観世音寺年中行事目録』には三笠郡町人六座役が六月十五日の祇園会にて「文正元(1466)年ヨリ能始」と記載している(『太宰府市史近世資料編』)。

宝永三(一七〇五)年の『筑陽記』には「竹の舞と云舞樂あり。当

地乃猿樂是を勉む」とされ、江戸時代前期には当地の猿樂集団たる六座が「竹の舞」の主体者であったと考えられる。

六座の各家の在所は『大野城太宰府旧蹟全図北』(江戸後期)(図は太宰府市指定有形文化財 木村敏美氏所蔵)の五条付近に書き記されている。(図版図2)

### 第3節 美麗役梅津家と竹のはやし

『天満宮社役年中行事』、『安樂寺天満宮年中行事記』により室町期における天満宮での神幸祭への供奉や「竹の林」の奉納は「びれい」が行っていたことが知られる。竹の曲を研究した筑紫豊は、「美麗」とは『新考三瀬郡誌』収容の伝承によれば、京都梅津郷に住まい菅原道真公に仕えた三橋氏が菅公を慕い筑紫に下り、高良山大宮司の世話により三瀬郡夜明村(玉垂宮近傍)を居とし田楽を務めたが、その子孫勘十郎が源頼朝に見いだされ、容顔美麗につき「美麗」の名を与えられたのが始まりとされる。中世には高良玉垂宮を拠点として「美麗」梅津家として知られ、藩政時代(江戸時代)には天満宮の神幸祭には馬を柳川の立花家から出頭させている事実があり、「美麗」を伝承する梅津家は立花家出入りの能役者でもあることから、元は筑後玉垂宮の梅津家との関係から六座の連中が能や美麗田楽を習得し、それが伝承されて今日に及んでいるのではないか。竹の曲での「さら」の使用もその時代を降らないもので、歌詞も中世の古風を保つており、筑後玉垂宮の梅津家(美麗)伝來の田楽が戦後間もなくすでにまったく滅亡している中で、古典的な伝統の護持されるところ

に大いに意義深いものがあることを切言せざるをえない、としている。

永井彰子の『美麗一族 竹の曲と神事能』によれば、美丽の一族は「京都の梅津を先祖の地とし、仕えていた道真公のあとをしたつて西国へ罷り下つたという伝承を持ち伝えてきた芸能者の一族」で、もとは中世の田楽集団の一つであつたとみられる。筑後玉垂宮大善寺の永仁4(1296)年の小五月会の次第には政所田楽を演じた記録があり、応安8(1375)年の筑後三瀬莊田口村熊野權現の六月祭礼の史料には美麗が猿樂を演じたことが記され、中世には筑後を拠点に活動していたことが知られる。美丽一族は梅津を名乗り、あるものは戦国期には筑前秋月氏に仕え、その後に筑前に入った黒田氏に仕えて甘木を本拠としたが、そこから分家し福岡城下に分家した家が黒田藩喜多流仕手方の梅津家になつたとされる。この家の江戸末期の当主梅津正利が慶応4(1868)年に編纂した文書の記録に、後鳥羽院のころ、一族の太宰府に住まう一万法師が禁裏御殿造営に際して「中門口、竹之囃子」の御用を務めた記事があるといふ。「中門口」とはビンザサラ役が演じる田楽のことと、「竹之囃子」は『高良山神幸次第記』に美麗が式三番などとともに演じたものとされている。史料の確かさには難があるものの、江戸時代には能楽師梅津家の祖先は中世においては田楽師であり、「竹のはやし」を演目として持っていた認識があつたと言え、『六座目録』にある「美丽役」は筑後の梅津家であつた可能性がある。現在の「竹の曲」の淵源は中世の美麗、梅津家につながりを持つといえよう。

六座が五条にあつた祇園社に奉仕していた中世には、『六座目録』によれば美麗役そのもの、ないしはその指導を受けた町衆が田楽や能を演じていたが、戦乱によりその関係は途絶えた。中世には天満宮の祭事には美麗の梅津家が「竹のはやし」を演じていたと思われるが、六座が伝えてきた締太鼓の墨書きから、文禄元（1592）年以降は「美麗役」に代わって市を復興した六座の町衆が、天満宮の神幸祭に「竹のはやし」を奉納するようになった可能性がある。江戸時代前期には「竹の舞」は「当地乃猿樂」が務めたとされている。神幸祭の供奉は『安樂寺天満宮年中行事記』によれば室町末期には「びれい」が務めたが、絵画資料に見られる装束などから江戸時代後期には、六座による竹の曲一団が供奉していたと考えられる。その構成はさざら複数名、横笛複数名、締太鼓複数名を中心とした参加であった。昭和27年の際の調査では江戸期までは笙も参加していたと伝えられている。

#### 第4節 竹の曲保存会の活動歴

竹の曲は太宰府天満宮の御神幸祭への供奉の他、啓発のため様々な活動をおこなっている。足跡として重要な事績を太宰府市公文書館や保存会が保管している簿冊から書き起こしてみたい。

1932（昭和7）年 NHKラジオ「風景太宰府詣で」出演  
1935（昭和10）年9月15日 NHKラジオ「配所の菅公の思ひで」出演

1936（昭和11）年9月13日 NHKラジオ「竹の曲」が全国中継される  
1940（昭和15）年12月9日 NHKラジオ「九州古舞踊大会」が全国中継される  
1952（昭和27）年10月29日 文化財保護委員会により「竹のはやし」の名称で国の助成すべき無形文化財に選定される  
1953（昭和28）年5月5日 「竹のはやしを讃える会」が発足。同時に「太宰府文化財保存顕彰会」の設立準備が町と町議会を中心進められる。

1953（昭和28）年10月6日 文部省文化財保護委員会（文化庁の前身組織）・長崎県主催「九州地区郷土芸能大会」（於久長崎市）に出演。顕彰会によりパンフレット「竹の曲」解説書が制作配布される

1953（昭和29）年10月20日 「福岡県芸能大会」（於小倉市）に出演

1959（昭和34）年5月25日 「第1回民俗芸能大会」（於久留米市）に出演

1960（昭和35）年4月12日 福岡県無形文化財指定（昭和29）（1954）年の重要民俗資料指定制度の創設による選定消失に伴う措置か

1960（昭和35）年 「竹のはやしを讃える会」から「竹の曲保存会」が発足

1971（昭和46）年3月11日 NHKラジオ「ふるさとの心」（全

- 国放送) に出演
- 1973（昭和48）年10月 京都府北野天満宮、三重県伊勢神宮  
(式年遷宮祭) に「竹の曲」を奉納
- 1976（昭和51）年4月24日 福岡県無形民俗文化財に再指定
- 1981（昭和56）年9月 文化財保存記録映画の撮影。笛の製作、演奏、舞を撮影
- 1983（昭和58）年10月 大宰府政庁跡にて天満宮秋思祭が斎行され「竹の曲」を奉納(これ以降出演は現在に至る)
- 1985（昭和60）年4月 NHK教育テレビ「歴史散歩遠の朝廷大宰府」に出演
- 1991（平成3）年2月 「福岡地区文化のつどい」に出演(以降、毎年イベント出演増加)
- 1993（平成5）年10月 伊勢神宮式年遷宮奉納。稚児、楽人すべての衣装を新調。衣装の保管を天満宮がおこなう
- 同月 「第1回ふくおか県民文化祭芸能大会」に出演（於八女市）
- 1996（平成8）年10月 伊勢神宮鎮座二千年祭で奉納
- 1998（平成10）年10月 「九州民俗芸能大会」に出演（於宮古島平良市）
- 1999（平成11）年 初めて稚児を天満宮社家から出す
- 2000（平成12）年 東大寺サミットに出演（於福岡市）
- 2000（平成12）年11月 「ふくおか県民文化祭子供の祭典」に出演（於福岡市）
- 2002（平成14）年4月 白衣、烏帽子を新調
- 2002（平成14）年10月 安行社秋季祭で奉納
- 2004（平成16）年11月 「第19回国民文化祭」に出演（於太宰府市）
- 2012（平成24）年4月 太宰府市市政施行30周年式典に出演（於太宰府市）
- 2013（平成25）年10月 伊勢神宮式年遷宮奉納
- 2015（平成27）年11月 「第57回九州民俗芸能大会」に出演（於太宰府市）
- 2020（令和2）年9月 太宰府天満宮御神幸祭が新型コロナウイルス流行のため行事縮小となり、お下りお上りとも神職のみで供奉が見送られ、浮殿前でのお御供上げと本殿前での還御祭の奉納のみとなる
- 2021（令和3）年3月 「民俗芸能公演中世の舞と響き」に出演（於福岡市東区）
- 2021（令和3）年9月 御神幸祭が新型コロナウイルス流行のため本殿前での還御祭の奉納のみとなる
- 2022（令和4）年8月 保存会が太宰府市の景観・市民遺産育成団体となる
- 2022（令和4）年9月 御神幸祭の斎行に合わせ太宰府市による無形民俗文化財調査実施
- 2023（令和5）年2月 太宰府市の市民遺産第17号に認定される。同月、太宰府市市政施行40周年式典に出演（於太宰府市）

## 第5章 令和4（2022）年の「竹の曲」の記録

### 第1節 太宰府天満宮神幸式の供奉

本調査をおこなった令和4年における竹の曲の主な活動は以下の状況であった。

#### ① 太宰府天満宮神幸式大祭（図版図1）

お下り供奉 9月22日20時～22時

##### ・道中「道楽」演奏

お上り供奉 9月23日15時～20時

##### ・道中「道楽」演奏

##### ・浮殿「お御供上げ」演奏

##### ・本殿前「ささらの舞」、「扇の舞」 奉納

#### ② 太宰府天満宮秋思祭 奉納上演 10月5日19時～

##### ・安行社祭日での奉納 10月17日11時～ 於三条

##### ・「ささらの舞」、「扇の舞」 奉納

また、この際の演者は以下の通りであった。

稚児 安武暖真

太鼓 田中幸一

笛 古川賢次、古川啓之助、田中典裕、長谷繁行、古川徹、安武敏幸、

田上真也、森川剛

(2) 9月23日土曜日 「お上り」（図版図20～24）

太宰府天満宮の神幸祭は太宰府市宰府四丁目にある太宰府天満宮本殿より、祭神の菅原道真公を乗せた神輿が、道真公の配所（府南館）の地と伝えられ、飛地境内である太宰府市朱雀六丁目にある榎社までの約6kmの間を約500人の奉仕の人々とともに隊列を整えて移動する祭事で、令和4年は9月22日金曜日に太宰府天満宮発、榎社着の「お下り」がおこなわれ、翌23日土曜日（秋分の日）に榎社発、太宰府天満宮着の「お上り」が催行された。

(1) 9月22日金曜日 「お下り」（図版図14～19）

竹の曲の一行為隊列においては先払いの後ろ、神輿の前の先驅の位置に配置され、神社の伶人とは別に「道楽（みちがく）」を移動しながら演奏した。

20～40 太宰府天満宮参道（以下、参道）大町交差点東において神幸の隊列に合流。（図版図14）

（例年は20～30頃）

その後、参道、新町、横町、五条、「どんかんみち」と称する道を辿り、血氣持ち様前、鼓石、を移動。適宜「道楽」を演奏。（図版図15～18）

21～50 榎社到着。神輿を迎えて「道楽」を演奏。（例年は22～00頃）（図版図19）

15..00 榎社に集合し社務所にて狩衣の装束に着替える。雨天のため上着の着用を急遽取り止め白衣の上にかつぱを着用することとなる。稚児も白衣で参加。

16..20 榎社東側の路上で隊列となり、お下りと同じ隊列内の位置で出立（例年は16..00頃）。その後、お下りと同じ経路で「道楽」を演奏しながら移動。途中、五条安武家にて湯茶の接待あり。

17..50 参道到着（例年は17..30頃）。大町にて隊列を離れ、歩道にて神輿を迎える「道楽」を演奏（図版図27）。その後、定遠館にて衣装を整え、稚児は舞いの衣装である「ゴザ袴」

（大口袴）に着替え（図版図28）浮殿に移動。

19..00 天満宮浮殿前にて「お御供上げ」の演奏（5分）を奉納（例年は18..00頃）（図版図29）。

19..30 神幸の隊列に加わり太鼓橋を渡つて本殿前に移動。神輿が本殿に帰着。

20..20 本殿前の石畳にて奠薙を敷き、円座を置いて演者が座して「ささらの舞」（3分）、「扇の舞」（5分）を奉納（例年は19..00頃、本殿正面の庇内にて奉納）。（図版図30～3

3）  
20..30 保存会代表が昇殿し玉串を奉納。神幸祭終了。

秋思祭は太宰府天満宮が大宰府政庁跡でおこなう菅原道真が「秋思」の勅題で漢詩を奉じた故事に基づく行事で、旧暦9月10日の夜に斎行される祭典。昭和42（1977）年より毎年斎行され、竹の曲は昭和58（1983）年より毎年奉納している。

18..30 大宰府政庁跡の仮設テントにて集合し装束（演奏者は狩衣、稚児はゴザ袴）に着替える。

19..00 祭祀開始。

19..20 祭壇前の舞台に登壇し、「ささらの舞」「扇の舞」を奉納。  
20..40 代表が祭壇に玉串を奉納し終了。

### 第3節 行事の練習

竹の曲保存会では年間を通じて演目の練習を太宰府天満宮内の施設（崇敬会館や社務所余香殿など）を使用しておこなっている。練習日は以下の通り。

3月26日、4月24日、8月1日、2日、5日、8日、9日、1  
8日、19日、22日、24日、28日、9月1日、2日、3日、4  
日、10日、11日、17日、18日、19日、20日、21日

練習の方法は、横笛と太鼓のみの演奏と稚児の舞を合わせた練習とがある。笛の練習の奏法については後述する。始めに道楽、お御供上げのフレーズを、またはささら舞のフレーズを、各自の笛の音色が揃う状況を確認しながら太鼓に合わせて吹奏する。その後、謡をおこなう。舞は部屋の中央に畳数畠を敷き、太鼓が座り、稚児が舞い

ながら立ち位置、足運び、所作の指導を受ける。神幸祭直前の練習では装束を付けて通しで演じる。練習後に持ち寄った道具にあわせて、先輩会員が新人に道具の扱い方や衣装のたたみ方などを指導していた。

## 第6章 竹の曲の構成要素－演者および道具と装束

### 第1節 竹の曲の構成員

竹の曲保存会では「道楽（みちがく）」「お御供上（ごくあ）げ」「さらの舞（まい）」「扇（おおぎ）の舞（まい）」の演目を伝承している（読みは保存会の呼び習わす言葉による）。

演者の構成は舞手の稚児男児一名、締太鼓・笛（壮年、老年男子7名ほど）であり稚児は小学校高学年の保存会の縁者から選ばれ、中学生になると次の子に交代することになっている。

楽器は横笛と締太鼓、さらで、横笛は使用する各自が締太鼓は担当を決めて保存管理している。衣装の狩衣と鳥帽子は太宰府天満宮から貸与され、代表者もしくは各自で管理している。稚児の衣装の「ゴザ袴」（大口袴）と侍鳥帽子は太宰府天満宮から貸与され、代表者が管理している。

令和4年時点での竹の曲保存会の会員は、以下の22名で構成されている。稚児と提灯係、旗持ちは会員関係者の子どもが務める。

会長  
古川賢次（横笛）  
副会長

田中典裕（横笛）

監事

長谷繁行（横笛）

事務局長

田上真也（横笛）

理事

古川啓之助（横笛）

田中幸一（締太鼓）

安武敏幸（横笛）

平井和宏（横笛）

三橋彰弘（太宰府天満宮）

正会員

古川徹（横笛）

森川剛（横笛）

田中慎一（横笛）

長谷雄治（横笛）

高木新一（横笛）

安武彗（横笛）

新飼哲哉（横笛）

準会員

田中正宏

田中健一

田中俊之

田中幸司

栗原昌久

味酒安儀

名譽会長 顧問

西高辻信宏 (太宰府天満宮)

顧問

楠田大蔵 (太宰府市長)

西高辻信良 (太宰府天満宮)

味酒安則 (太宰府天満宮)

田中一夫 (五条)

斎藤浩平 (五条)

稚児

安武暖真

提灯係

星原悠佑

旗持ち

赤津大介

聞き取り調査によれば、古川家は六座の「米屋」の系統につながりを持つ人と「あいもの屋」の伝承を持つ家系の人がある。田中家は米屋古川家と姻戚関係があり、長谷家は元禄12(1699)年の六座面の箱書きにその名が見られ、近代においては六座「あいもの屋」の吉塚家との姻戚関係が、安武家は六座の「小間物屋」、平井家は六座の「金屋(鑄物屋)」、斎藤家は六座の「鍛冶屋」の系譜であり、

それ以外の人はこれらの家系から嫁いだ先の子や孫、会員紹介の地元在住者から構成されている。

稚児役の子どもも会員の家系から出しているが、平成に入った一時期にはそれが叶わらず、太宰府天満宮の社家の家系である味酒家、松大路家から出した期間があった。そういったこともあり、聞き取りにおいては現在の会員の意識の中に六座や五条といった家系や地元に対するこだわりが感じられた。稚児役の子どもは成人となつて演奏者として会に戻つてくることが多い。

竹の曲保存会で使用・管理している道具類には以下のものがある。

## 第2節 道具と装束

### (1) 締太鼓 (図版図48~53)

直径35cm、厚さ15cmの胴が黒漆で塗られ、皮の両面に朱色の紐で互い違いに編み、たわみを締めるため胴部の中央で三重に紐を巻いている。神幸式の移動時に演奏する「道楽」の時には、片手で胴の紐を持って太鼓を縦にして叩く。神前での演奏の際には、正座した膝に当てるよう斜めに置き、片手で撥をもつて叩いて演奏する。

胴部には金彩色の松の蒔絵と、朱漆で書かれた「博多掛町 岡部正平、同綱場町 吉田忠三郎、同築港 北村友吉」銘が入る。「築港」の地名から太平洋戦争前後頃の銘か。もう一つ直径35cm、厚さ16cmの胴が黒漆の金彩色で梅鉢紋が入る新しいものがあるが、やや重いため祭事ではもっぱら前者の古い方が使われている。古い方は令和4年に皮を博多千代町の梅津太鼓店で張り替え、新しい方は令和4

年に新規に購入している。

それ以前に使っていた六座に伝えられて来た文禄元年の墨書銘のある締太鼓は、後世に残すため太宰府天満宮に奉納し、現在は使用されていない。直径1尺2寸、高さ5寸と記録され、現在の太鼓とほぼ同じ法量である。胴内部に「文禄元年 修復仕者也 古川新九郎」と墨書があり(『図録太宰府天満宮』昭和51年太宰府天満宮)、六座の文書にある五条の市が復興された年(1592年)に修理されたことが知られる。この太鼓を昭和39(一九六四)年に六座から太宰府天満宮に奉納した書類が保存会会員宅に残されている。胴部内の墨書にある古川新九郎は六座の文書に見られる米屋の古川氏であり、現在の保存会の代表古川氏はこの家系にあたるという。昭和27(1952)年下浦奏著『無形文化財指定 太宰府天満宮・竹曲』によれば「太鼓は宝暦8(1758)年の板書があり、その一つは胴内側に書銘があり、文禄元年修復仕者也古川新九郎としてある。文禄元年は(1592)に当たる。尚ほ太鼓には漆黒組立の華麗な台が一つついていて、それらを収めた古い桐箱の内底には次の墨書がある。

る。

寄進之吏

太鼓撥台共 宿坊 六度寺秀賀

右享保十乙巳歳八月日

同再興 宿坊 六度寺船賀

宝曆八戌寅八月日

箱蓋表にも墨書で宝曆八年八月廿一日の日付があり、そこには博

多の寄進者廿数名の名が記されている」とあり、江戸期には天満宮社家の原山六度寺や博多の町衆が六座の道具調達に加勢していた様子が知られる。

今の道具の管理は会の代表か演奏者がおこなっている。

## (2) 横笛(図版図54～58)

10年ほど前までは各家で相伝されてきた横笛を使い、または各自で篠竹を探して相伝された笛を手本にして製作していた。そのため音色には笛ごとの差異があつた。昭和27年の記録には長さ1尺5寸8分(45.7cm)で指孔7つの横笛の略図が見られる。現在は五本調子の京都で製作された指孔7つの篠笛を購入して使用している者もいる。平成27年十一月には会員で大分の専門家のもとへ篠笛製作の体験を行つている。また、製作の際の吹き口と指の間隔の位置を記した棒を尺の代わりに自作して使うこともある。彩色は黒漆で両端部や吹き口と指孔の間のみ赤漆で帯状に塗るものもある。吹き口の左右ないし端部に金泥や朱漆で梅鉢紋を入れる場合もある。法量は個体ごとにばらつきがあるが、長さはおよそ40cm、太さは2cm程度。吹き口のみのマウスピース状のもので吹く練習をすることもある。昭和27(1952)年の段階では笛の奏者は6から8人とされ、現在とほぼ同数であった。伝承では明治初期頃までは「竹の曲」の歌詞の通り笛の他に笙があつたとされ、江戸時代の絵画資料でもそのことは確認される。道具は各自が管理している。

(3) ササラ (図版図40、45)

使用されたささらは保存会代表の古川賢次氏が所有するもので、全体の平面形は長方形を成す。両脇の木製の把手、鳴り子としての竹製の札53枚、それをかがる緋色、ないし深紫色の麻の紐、紐から連なる房からできている。両脇の把手（昭和27年の記録では「親木」「添木」とあり）は褐色、鳴り子は外側が褐色、内面は朱色の漆塗りとなっている。古川家で相伝されたものを模倣して作り継いできており、現在では複数存在し、大きさには個体差がある。大きいものは全幅70cm、高さ16cm、厚さ1.5cmを、小さいものは全幅5.2cm、高さ14cm、厚さ1.2cmを測る。他所の田楽舞で使用されるささらと比べて幅に対する高さが高い形状をとなっている。今年はお上りの供奉の際に練習で使用していた小さいほうのささらが切れ、お御供上げから本殿前の奉納の際には予備の大きなささらが使用された。昭和27（1952）年の資料『無形文化財指定 太宰府天満宮・竹曲』によれば、その時点ではささらの札の数は49枚であり、明治41（1908）年までは札の数が51枚あつた虫食いのある古いささらが使用されており、この年の神幸中に紐が切れて札が2枚散逸した話が採録されている。紐の締め方で鳴る音が変わるとされている。古いささらは昭和39（1964）年に太宰府天満宮に奉納されている。行事で使用する道具は会代表が管理している。ささらは稚児1名が使用するが、絵画資料によれば江戸時代までは神幸祭の際には大人が複数名で演奏していた。

(4) 扇 (図版図46、47)

稚児の持つ扇は片面が金、裏面が銀の扇子を用いている。長さ30cm、拡げた状態での幅は55cmを測る。行事で使用する扇は会代表が管理している。

(5) 狩衣、鳥帽子、ゴザ袴、侍鳥帽子 (図版図34～39)

演奏者は山吹色の狩衣（水干）を揃って着用している。麻材が用いられ、袖口は浅緑の括り紐が通っている。下に白衣を頭に鳥帽子を着用する。

稚児の上着は浅紫の袍で、袖口には白と浅紫を交互に染めた括り紐が通っている。現在の衣装は平成25年以降のもので、それ以前の袍については聞き書きや記録写真によれば別の梅染色（褐色、昭和20年代頃）、山吹色（黄橙色、昭和40年代～平成）、浅緑色（平成5年頃以降）の生地のものを使用した時期もある。袴は「ゴザバカマ」と呼ばれる白い大口袴で、能の大口袴と同じく尻から腰の位置に尻幅より一回り広い幅の布地（上着の左右後見頃の幅で「大口厚板」と書く資料もあり。後ろの布地の下にゴザ畳で使用される上敷きが入っている）を、尻の後ろで帆を張るような形になるよう緩やかに折ったものを纏わせている。上部で折り返した裏側には布の折り返しの立ち上がりが保つように帶紐に道具が付けられている。舞の装束のため衣装の中ではこの部位の損耗が最も激しいという。頭には侍鳥帽子を被る。

履物は全員白足袋で草履をはいている。行事で使用する衣装類は

各自が管理しているが、クリーニングなどのメンテナンスは会でおこなっている。

#### (6) 面（図版図58、59）

現在、演目として面を使用するものはないが、六座の芸の幅と謡としての「竹の曲」の背景を、後の第7章第3節で考察するためここで紹介しておく。かつて六座には木彫りの面が複数伝えられて来た。面の詳細は『太宰府市史民俗資料編』には以下のように記述されている。

「面はいざれも南北朝から室町期のものと考えられ能面が様式化される以前の古風を伝えるもので、女面二面、坊主面一面、翁面一面、熊坂面一面が伝えられている。各面には作者と思われる墨書き銘があるが、翁面にある「赤子大夫」は『觀応三年（一三五二）周防国仁平寺本堂供養日記』中にみえる猿樂者赤子大夫と同一人物と考えられている。熊坂面は箱書に「熊坂面」とある」とから、これにあたるものと想定しているが、能面の小癒見に似ており、五面の中で最も重く、材質・作風を他の四面と異にしている。なお箱は、天明元（1781）年六月に元禄十一（1699）年の古箱のとおり、銘を写して改めたものであるが、その銘の中に「ぎおん講」とあり、祇園社とそこに奉納されたという六座の能との関わりを物語る。」

箱書きについては『太宰府市史建築美術資料編』に翻刻がある（第4章第1節（3）を参照）。

銘文には六座にはもと八面あったが元禄12（1699）年に秋

月黒田甲斐守の所望により翁面二面を差し出した旨が書かれ、江戸時代以前には演目に合わせ複数の面が管理されていたことを知ることが出来る。六座文書にある「能五番仕上」に通じる内容といえる。

これらの中と箱は「六座の面附 納入箱」として平成24（2012）年5月25日に市の有形文化財に指定され、太宰府天満宮が所有管理している。

#### 第7章 奏法と舞

##### 第1節 「竹のはやし」の曲について

昭和27年の国の無形文化財に選定された時には「竹のはやし」の名称が使用されている。「はやし」の文字は文献によれば室町期には「竹の林」、江戸期には「竹之囃子」「竹ノ舞」「竹之ハヤシ」と記載され、明治期以降は「竹の曲」の文字が充てられている。「曲」の文字が充てられた所以は分かっていない。「曲」は「くせ」と読めば「曲舞」という中世芸能につながるが、現在伝えられている「竹の曲」の曲調は強い拍で展開する「曲舞」とは異なり、一定のスローなテンポで演奏される。あえて言えば水干姿、大口袴、鳥帽子、扇、稚児といった舞手の容姿と神前での舞といった要素は「曲舞」と類似すると言えるかも知れない。

#### 第2節 締太鼓と横笛（図版図12、13）

締太鼓は短い撥を片手で打つ打ち方で、「道楽」、「お御供上げ」、

「ささらの舞」<sup>(まい)</sup>のいずれの曲においても乱れ打ちなどはなく、ゆつくり淡々と一拍づつ打ち続ける奏法である。

横笛の奏法については、現在参加している会員の親の世代までは口での指南で「オー」「ヒヤー」「トー」「ロー」等の言葉で節回しや抑揚を教わっていた（伝統的な口唱歌法）。非常に感覚的な指導法で個人差があり、なかなか習得するには苦労したとのことであった。現在では西洋音階を援用した練習を合同で一斉に行う形となつて演奏にまとまりがでているという。笛の練習では龍笛の低い音（和わ、ふくら）と高い音（責せめ）の音の出し方の鍛錬を下敷きとした方法をおこなつていている。演目の吹奏の前に①ドレミファソラシラソファミレドを8拍づつ吹き（ロングトーン）、②先の音より1オクターブ高い（責せめの）ドレミファソラシラソファミレドを8拍づつ吹き、③ドレミミファファソララシララソソファファミミレドを4拍づつ、④低いド、1オクターブ高い（責せめの）ド、低い（和ふくらの）レ、高いレ、低いミ、高いミ、低いファ、高いファ、低いソ、高いソ、低いラ、高いラ、低いシ、高いシ、低いラ、低いソ、高いソ、低いファ、高いファ、低いミ、高いミ、低いレ、高いレ、低いド、高いドを4拍づつ、という音の鍛錬をおこなつていている。吹く力を付け、音を安定して出すためにロングトーンの奏法を繰り返す。

保存会では演奏する曲を曲中の無演奏の間で区切り、順番で便宜的に1番、2番と呼称して練習している。曲は「道楽」が1番から5番の演奏からなり、「ささらの舞」は1から3番の演奏後に「道楽」

の1番から5番を演奏して一つの曲としている。「お御供上げ」は1番から9番の演奏からなる。保存会では曲ごとの指運びによる譜面（運指表）を図化し（図版図12、13）、練習で使用している。

### 第3節 舞

「ささらの舞」と「扇の舞」の二つを連続して太宰府天満宮の神幸祭の最後の次第として毎年奉納している。稚児が一人で約畠二畠分の空間で舞うもので、「ささらの舞」は鼓太鼓と横笛の伴奏に合わせてささらを鳴らしつつ舞い、「扇の舞」は舞手の稚児が謡「竹の曲」にあわせて扇を持って舞う形をとる。「ささらの舞」は曲調がゆったりした一拍づつの調子のため、舞も神能のようにゆつたりしており、飛び跳ねるような動作はなく、拍に合わせささらを一拍づつならし、足も一歩ずつ出したり後退させる。

令和4年10月22日の神幸祭の本殿前の奉納では、本殿前の石畠に御座を敷いて奉納した。年によって本殿正面の庇内や殿上で奉納されたことがある。撮影用に照明を当てたが、本来は灯火を暗い状態にして上演されている。

#### (1) 「ささらの舞」(図版図3～6、11)

保存会では曲中の無演奏の間で区切り、順番で便宜的に1番、2番と呼称している。

「ささらの舞」は8番からなり、畠二畠ほどの空間で正方向、斜方向、横位、逆正方向の動きで、最後は始点に戻る動きを取る。楽器は

締太鼓と横笛のみで謡は伴わない。

1番は正面正中の位置から正方位（正面方向）に押し出して後ずさりして戻る動きをとる。ささらは始点で太鼓に遅れてささらを1つずつ鳴らし、次の拍で一步進め、4つ目と5つ目は歩まず止まつて鳴らし、6つ目から歩を後退させる。

2番は左斜位に押し出して始点に戻る動きをとる。ささらは1番と同じ。

3番は右斜位に押し出して始点に戻る動きをとる。ささらは1番と同じ。

4番は反時計回りに外周を回り1時の位置に移動し左横を向く。

ささらは太鼓に遅れて1つずつ鳴らし、足は鳴らした後で進める。

5番は時計の1時方向（説明上の便宜的な表現。以下同じ。）の位置から正面を横切つて10時方向の位置に移動し正面に背を向ける。ささらと歩は以前に同じ。

6番は10時方向の位置から9時方向の位置に移動し正面右を向く。ささらと歩は以前に同じ。

7番は6番最後の位置から始点に戻り正面を向く。ささらと歩は以前に同じ。

8番は1番と同じ動きで始点に戻り終了する。ささらは1番と同じで、最後に戻った6つ目の歩で2回鳴らす。

(2) 「扇の舞」(図版図7-1)

「扇の舞」は3番からなり、笛太鼓を伴わず謡のみでおこなう。各

番の冒頭に舞手である稚児の独唱が入る。

1番は舞手が始点で両手を横に広げて独唱する。「しゃくそんせつぼうのいにしえはー」で右足から反時計回りで約畳1畳の範囲を周回する。「しんのしちけん」で左に折れ、「ちくりんせいし」で左に折れ、「はやせし」で左に折れ始点に戻る。「もうびと」で正面左斜位を向き右足を一步下げ、平行に上げた腕のうち扇を持つ右手を左手に添えて弓に矢をつがえるような所作をして、右足から3歩進んで2歩後退して足をそろえる。「いつとなく」で左手は横のまま右手の畳んだ扇で前かがみしてしゃがみながら、水を柄杓でくみ取るような所作をする。

2番は扇を拡げ、左手は横のまま、右手で扇の右端をつまんで90度傾け、正面に対しても顔を隠すような所作をして「もうせどもさだめずながめつ」と独唱する。「つつ」の時に右足を右後ろに引き、扇で円を描くように後ろに引いて真後ろで扇を返し、左手のところまで戻す。この時、左手は弓を握るような「ぶし」の形で腕を伸ばしている。左手を伸ばしたまま左斜め前に右足から3歩進み、2歩さがる。この時、右手の扇は腰を持って胸の前で構える。右足を一步後させ、次に左斜め前に右足で大きく踏み出し、次に左足も踏み出す。「たまらぬ」で左、右の順で腕を拡げ、「たまざさの」で腰を折りながら頭も下げる扇を大きく腕ごと仰ぐような仕草をする。「さえだ」で大きく足を拡げ、手を横に広げたまま扇を右後ろで下に下げる所作をなし、地面の上に落ちた扇の表裏を入れ替えて、地を這わすよう正面方向に移動させ、腰を伸ばして正面を向き左手を横に、扇

を胸の前で地面と水平になる形で構える。「つきかげの」で扇を構えたまま2歩前に進む。「はにを」から4歩で正面に進み、4歩目で右に90度折れて、「うつろえて」で4歩進み、4歩目で右に90度折れ始点を向く。4歩進み、「ひかりこそ」の4歩目で両手を横に広げて右手の扇を上に立てる。この時、体を右回りで反転させ正面を向く。この時つま先を付け、踵を浮かせて体を回す。「せんしゅうばんせい」の間に4歩進み、4歩目で右に90度折れる。「おぼえたり」で4歩進み、4歩目で右に90度折れ正面に背を向ける。「しちくのしらべ」で4歩進み、4歩目で右に90度折れ、「たえにして」でどどまり、「よろづの」で右足を一步斜め後ろに引いて、拡げた両手の扇を持つ右手で弓に矢をつがえるような所作をする。「こえを」で扇を翻して縦に胸元で構える。「ととのゆる」で右足から3歩進み2歩下がって足をそろえ、左手、右手の順で腕を横に開き、腰を折って頭を下げ、扇を後ろから弧を描いて仰ぐような仕草をし、上体を建てるると同時に扇を翻して要を持ち、胸元で扇の親骨の横をつまんで縦に（扇の正面裏面が横を向く位置で）構える。

3番は構えたまま「げにもめでたくおぼゆる」と謡い、「はー」で

右足を斜め後ろに1歩引き、扇親骨の横をつまんだまま前から弧を描いて頭上を通した後、後ろから前へ弓に矢をつがえるような所作をして扇を抱え込むように胸元に構える。「なによりも」で左斜め前に右足から3歩進み2歩下がって足をそろえる。「あまねく」で左手、右手の順で腕を横に開き、扇の要を持つて腰を折って頭を下げ、扇を後ろから弧を描いて仰ぐような仕草をする。その流れで右足を1

歩右後ろに引き、扇に目線を合わせたまま両手を広げて扇を右後ろに下ろし、腰を折ったまま地面すれすれで扇を翻して、円弧を描いて水面をすべらすように扇を正面にやり、「もうびとに」で左手を横、右手は扇の要を持つて地面に水平に構え、右足から4歩進んで右に折れ、「なんぼくに」で3歩進み4歩目の右足で右に折れ正面に背を向け、「うえおきて」で3歩進み4歩目の「ながめばや」で両手を広げたまま180度右回りで正面を向く。この時つま先を付け、踵を浮かせて体を回す。3歩進み4歩目の右足で右に折れ、「へいやの」からの10歩目の右足で右に折れ正面に背を向け、「たいへいらく」からの6歩目の「よろこびは」で左に折れ、4歩目で正面に戻り、「じようにより」で右足を斜め後ろに一步下げて扇親骨の横をつまみ、後ろから前へ弓に矢をつがえるような所作をし、扇を抱え込むように胸元に構える。3歩進んで2歩下がって足をそろえ、左、右の順で腕を横に広げ、「いつもみどりの」で正面を向いたままふりかぶつて扇で弧を描くように地面に下げ、扇を胸元に戻して「たけのはやし」で扇を胸の正面で構え、正面方向に押し畳んで両手で腰の前に持ち、舞を終わらせ一礼する。

#### 第4節 謡「竹の曲」

謡の歌詞は口伝えで継がれてきたもので、昭和27（1952）年の国文化財選定に際して文字に起こされた。この時点で語彙が不明な箇所があることが指摘されているが、その後の解説は進んでいない。「千秋万歳」などの語が織り込まれた祝儀の小謡であり、吉祥

の松竹梅のうちの竹が主題になっている。竹林の美しい風情に仏教の流布の要素が加えられ、時の移ろいの中でも緑の竹林があり続くことの目出度さをうたつてている。

歌詞の要素のうち「吳竹」「七賢」「月影」「竹を植え」などの要素は室町期の藤原高清編『公武歌合』(『群書類從』巻第二百十四和歌部六十九歌合三十五)にある和歌に共通するものがある。

十七番 月下竹

右 俊通

植をきて月にそ契る秋のよの千夜を一夜のその々くれ竹

二十一番

左 親長卿

吳竹のかけまで袖にうつる也まとのむかひに月めくるらし

右 長貞宿祢

世々をふる竹の末葉にすむ月やとよらの宮の古のかけ

二十二番

左 季通卿

我友とみしもわすれて月影のさはれはいとふ軒の吳竹

右 則途

月をよもかくろへとては植をかしかしくすみし竹の林に

左申云。七賢も自然竹の林にすみ侍るか。あなかちうへ侍ら

し。

二十三番

左 清房

くれ竹のかはらぬ色にを／＼露の光を受けてやどる月かな  
(※引用の途中の判詞等一部略す)

竹林の美しい風情を織り込んだ「竹の曲」の歌詞には、室町期の和歌の竹林に対する世界観が織り込まれているもの思われ、作者の文學的な背景が垣間見える。

「竹林」と「七賢」、仏教流布の要素は室町時代の世阿弥作の謡曲『竹雪』の歌詞にも見られる。

「竹林の七賢竹故消ゆるみどり子を。二度かへすなりと。

告げ給ふ御声より。月若生き返り悦びは日々にすふ。

かくて親子にあひたけの。／＼世をふる郷をあらたまねて。

佛法流布の寺となし。佛種の縁となりにけり。

二世安樂の縁深き。親子の道ぞ有難き／＼。

同じ世阿弥作の謡曲「老松」は筑紫安楽寺(現太宰府天満宮)に都の梅津某が訪れて展開する物語で、吉祥の松と梅が主題として取り上げられている。中世後期に成立した筑後高良玉垂宮の『高良玉垂宮神秘書』によれば、梅は大唐(中国)、松は日本、竹は天竺を指すとされ「タウトテンチク、我チウヲ ヨセタモウ、三国フサウノ心モアリ(唐と天竺、我朝を寄せたもう、三国扶桑の心もあり)」として三位一体の考えを示している。ここでも謡曲『竹雪』と同様に竹は天竺(佛教を示唆するものとして捉えており、おのずと「釈尊説法の」で始まり竹を主題とした「竹の曲」の歌詞の背景が見て取れる。謡曲『竹雪』の「七賢」と「竹」は枕詞のような関係で使われており、「七賢」は意味として歌の物語に係るものではない。その点でも「竹」

曲」と共通している。

六座は「翁面」を含む中世の複数の面を所有し、美麗役と係わりながら能五番を上演していた。「竹の曲」はかつて能の形が定型化する以前の複数の寿ぎの演目の一つとして、「老松」などと共に安樂寺天満宮の社頭で上演されていたものかも知れない。

稚児の独唱は抑揚がないやや甲高い口上風で、その他楽人が謡う部分は祝儀の曲であり、抑揚はあるが拍節はなく、たおやかな曲調である。

口伝えで謡われている言葉通りの歌詞は以下のとおりである。あえて漢字をカタカナでの表記にしている(訳文は第4章第1節(4)を参照)。昭和27年の記録時の歌詞と異なる部分は、以前の発音をカツコ内に表記している。1番から3番は保存会が便宜的に練習で使用している曲の区分を示している。

1番

【稚児独唱】

シャクソンセツポウのイニシエは

【樂入一同】

タケのハヤシにテラをタて シンのシチケンと いひしげト

チクリンセイシ シスマンセイシ タケを ハヤセしモロビトの  
ナオヨヨはフれど  
いつとなく

2番

【稚児独唱】

モウせどもサダメずナガめつ

【樂入一同】

アラワレ(アラレ※) たまらぬタマザサに サエダモリ(モレ※) く  
るツキカゲの  
(ツキカゲに※)

ハニヲーワ(ハニオク※) ツユにうつろえ(うつろひ※) て ツユヲ  
ミガけるヒカリこそ

センシュバンゼイとオボえたり  
シチクのシラベタエにして ヨロヅのコエをととのゆる

3番

【稚児独唱】

ゲにもメデタクオボユるは

【樂入一同】

ナニよりも ナニよりも あまねくる(アマネク※) モロビトに  
イチグナンボクに クレタケをウエオキきて  
ナガめばや ナガめばや ヘイヤのフエによりショウにより

ワレもヒトもオシナメ タイヘイラクをフキナラし  
ヨロコビはコレをして(コレとして※) オモウヒトにより  
タケのいつもミドリのイロハえて チヨをカサねてタケのハヤシ  
(※は昭和27年の記録時の歌詞)

第8章 まとめ

第4章で紹介したように、竹の曲の無形民俗文化財としての価値

については筑紫豊氏が指摘した「元は筑後玉垂宮の梅津家との関係から六座の連中が能や美麗田楽を習得し、それが伝承されて今日に及んでいるのではないか。竹の曲での「ささら」の使用もその時代を降らないもので、歌詞も中世の古風を保つており、筑後玉垂宮の梅津家(美麗)伝来の田楽が戦後間もなくすでにまったく滅亡している中で、古典的な伝統の護持されるところに大いに意義深いものがある」ということに尽きる。「竹の曲」が日本の芸能史において希少となつた中世の田楽の要素を今なお色濃く残しており、それが毎年おこなわれる太宰府天満宮の秋の神幸祭において、天満宮門前町から榎社の間の天満宮参道や、「どんかんみち」といった歴史的なまちなみを練り歩く間に演奏され、神社境内においても近世以来続く場所と方法で上演されており、まさに今に生きる都市祭礼としての中世の芸能といえることが、今回の調査で改めて認識された。

#### 参考文献

竹の曲の文化財指定関係の公文書について太宰府市公文書館、福岡県文化財保護課が保管する簿冊類がある。太宰府市公文書館分については同館が刊行した紀要に竹の曲に関する資料のリストが2021年に公開されている。公文書館分の資料には昭和27年に国による選定が行われた際の太宰府町の簿冊があり、下浦奏著のガリ版刷りの資料には往時の聞き書きや道具類、装束などの調査記録が見られる。

「目録旧社会教育課永年文書細目録」『年報太宰府学』第15号20

21年太宰府市公文書館

下浦奏『無形文化財指定 太宰府天満宮・竹曲』昭和27(1952)

年川井清敏編集

筑紫豊「神幸祭と「竹の曲」」『菅原道真と太宰府天満宮』1975年太宰府天満宮文化研究所編)

永井彰子「美麗一族 竹の曲と神事能」『天神さまと二十五人』2002年太宰府天満宮文化研究所

『図録太宰府天満宮』昭和51年太宰府天満宮  
『太宰府市史民俗資料編』1993年太宰府市

『太宰府市史近世資料編』1996年太宰府市  
『太宰府市史建築美術資料編』1998年太宰府市

#### 付記

本報告を執筆し記録映像を撮影・編集するに当たり、下記の個人、団体より取材の機会をいただき、ご指導・ご教示や情報の提供を受けた。記して感謝申し上げたい。

太宰府天満宮、竹の曲保存会、福岡県文化財保護課、太宰府市公文書館、森弘子、アンダーソン・依里、高橋史子(太宰府天満宮文化研究所)、柳智子、荒川真希(福岡市文化財活用課)(敬称略す)

太宰府市無形民俗文化財調査報告書

竹(たけ)の曲(はやし)

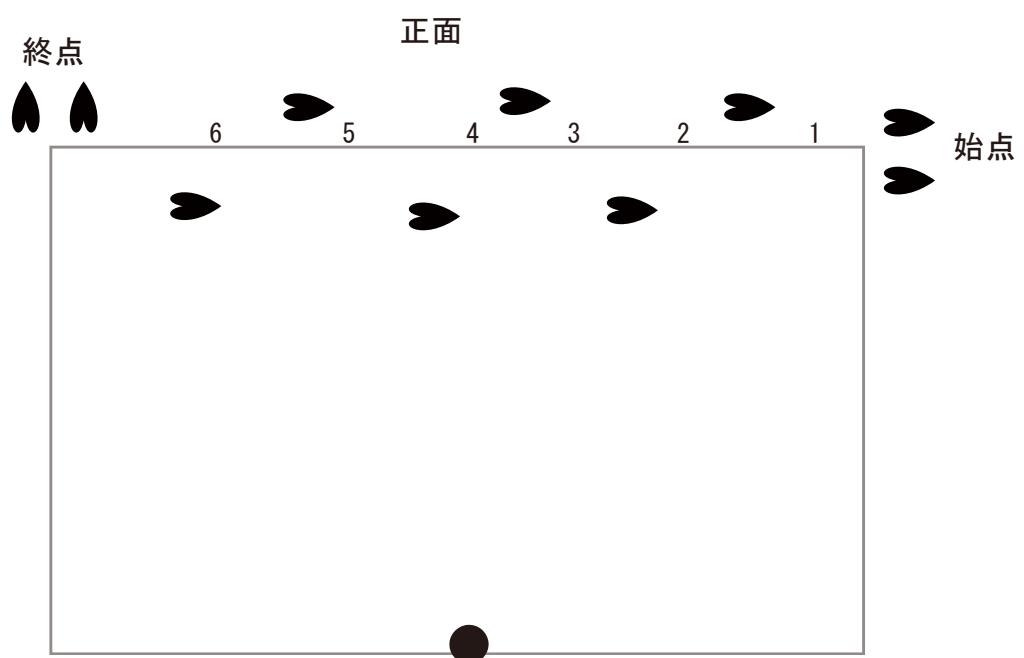
令和5年1月

出版 太宰府市教育委員会  
編集 (有)システム・レコ

# 図 版

ささらの舞

5 番



6 番

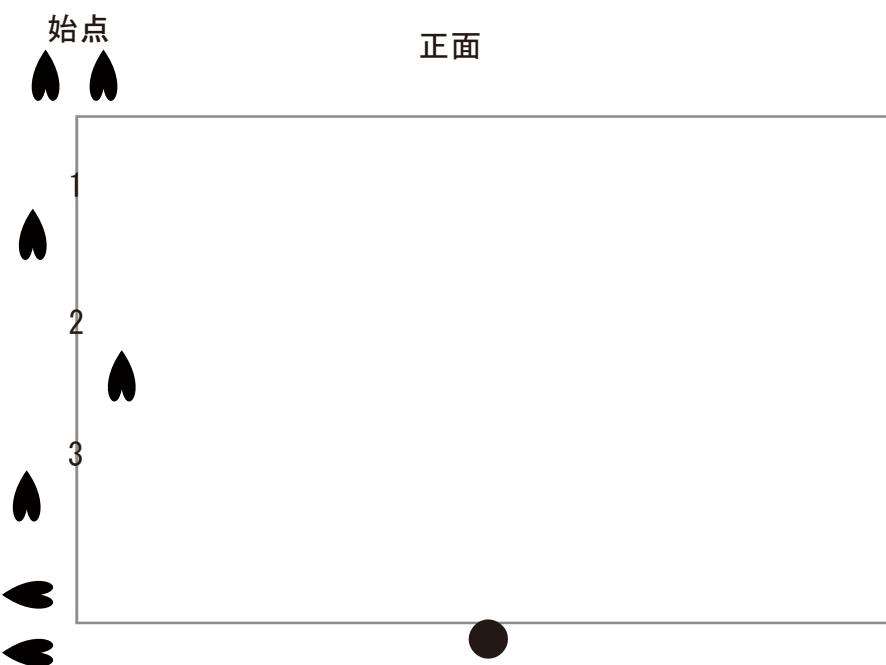


図 5 ささらの舞の演技 5 番、6 番



図1 太宰府天満宮の位置と神幸祭のルート（地図は国土地理院の電子地図を使用）

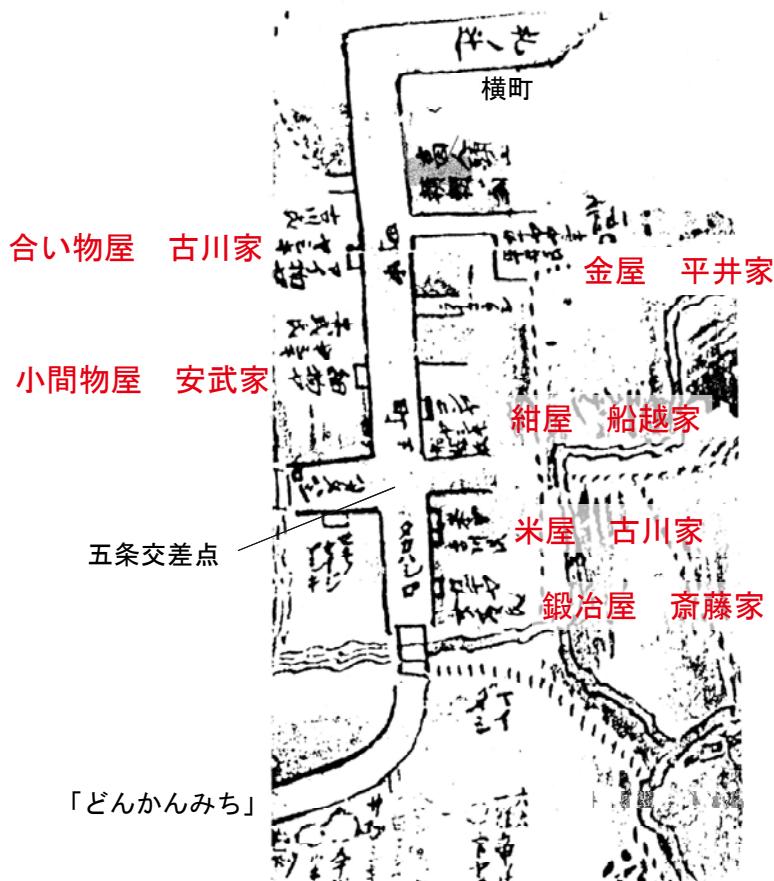


図2 大野城太宰府旧蹟全図北（江戸後期）の五条部分と六座の在所  
(図は太宰府市指定有形文化財 木村敏美氏所蔵)

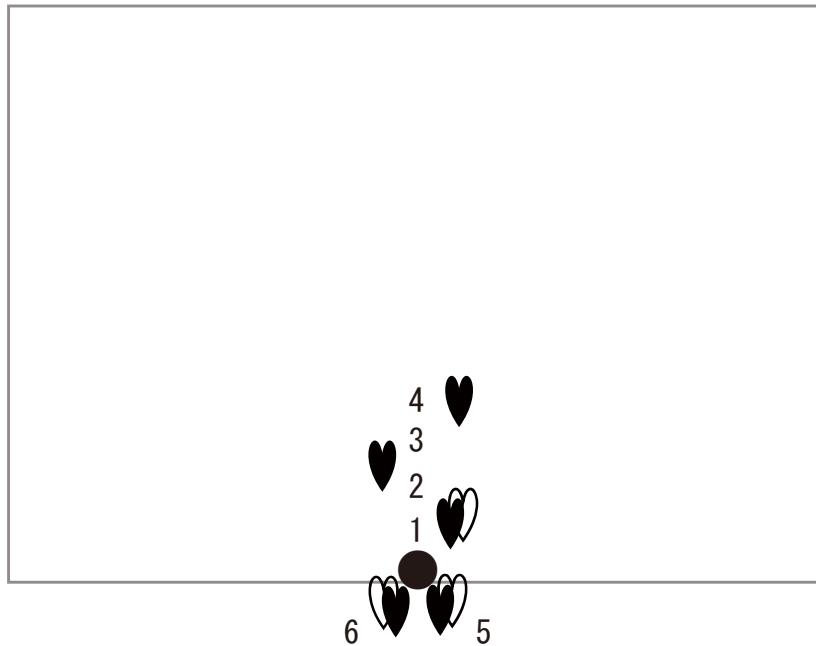
## ささらの舞

笛が鳴り太鼓の音に合いの手を入れるようにササラを鳴らして前進する。

4は歩を進めない。5、6で始点に戻る。

正面

1番



※数字はササラを鳴らす位置

行きは黒の足、戻りは白抜き

左斜め前に進む。所作は1番と同じ。

正面

2番

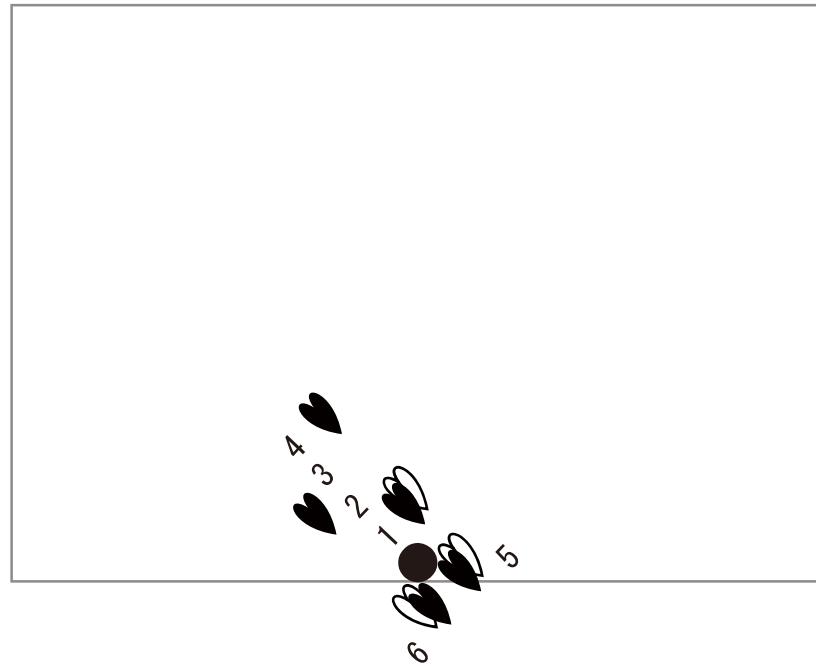


図3 ささらの舞の演技 1番、2番

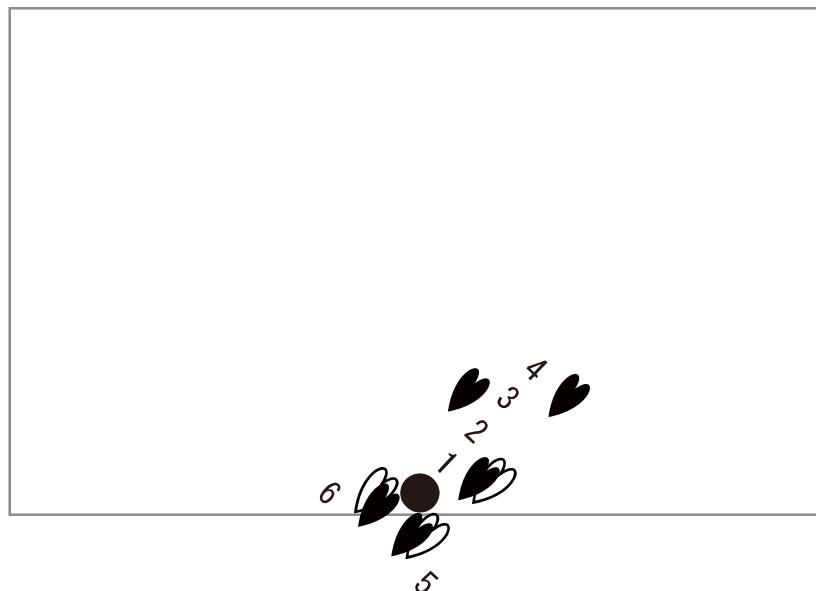
### さらさらの舞

右斜め前に進む。

所作は1番と同じ。

正面

3番



右横向きから1～2に進み最後に左横を向く

4番

終点

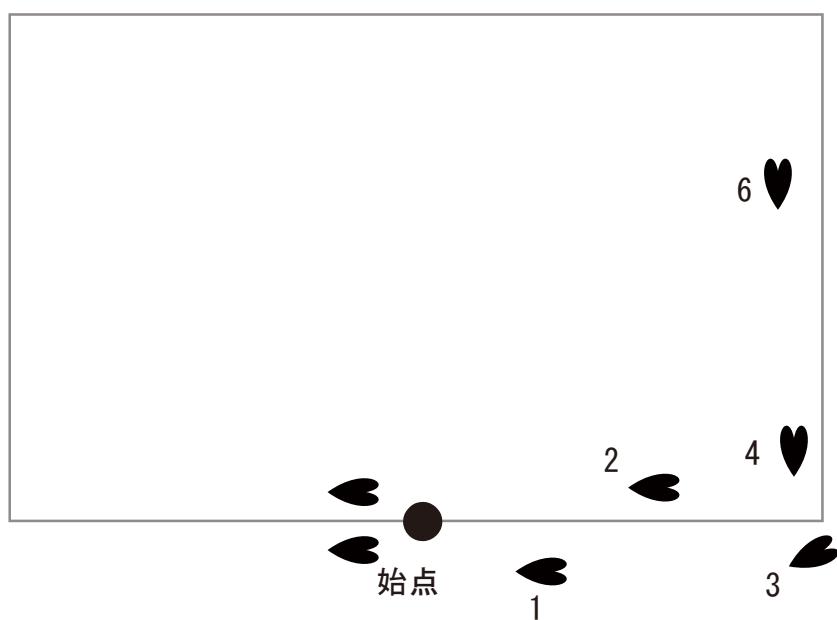


図4 さらさらの舞の演技 3番、4番

### さらさらの舞

中央に向かって進む。3で鳴らした後に足をそろえて終点へ。

7番

正面

始点

1 2 3

終点

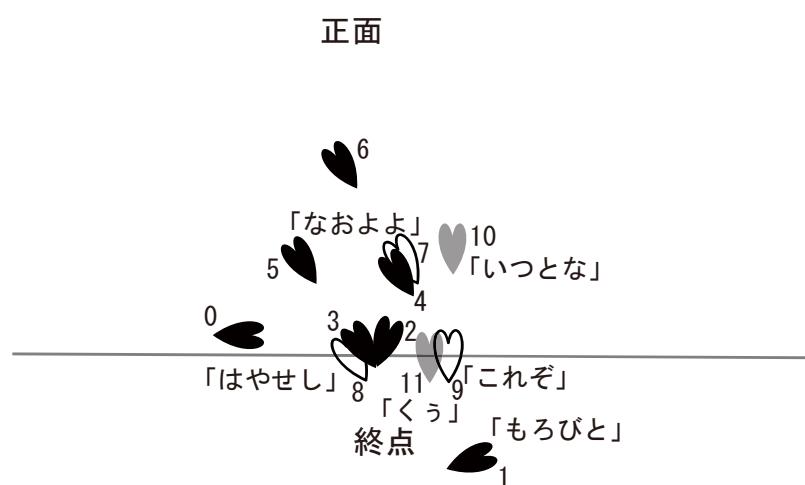
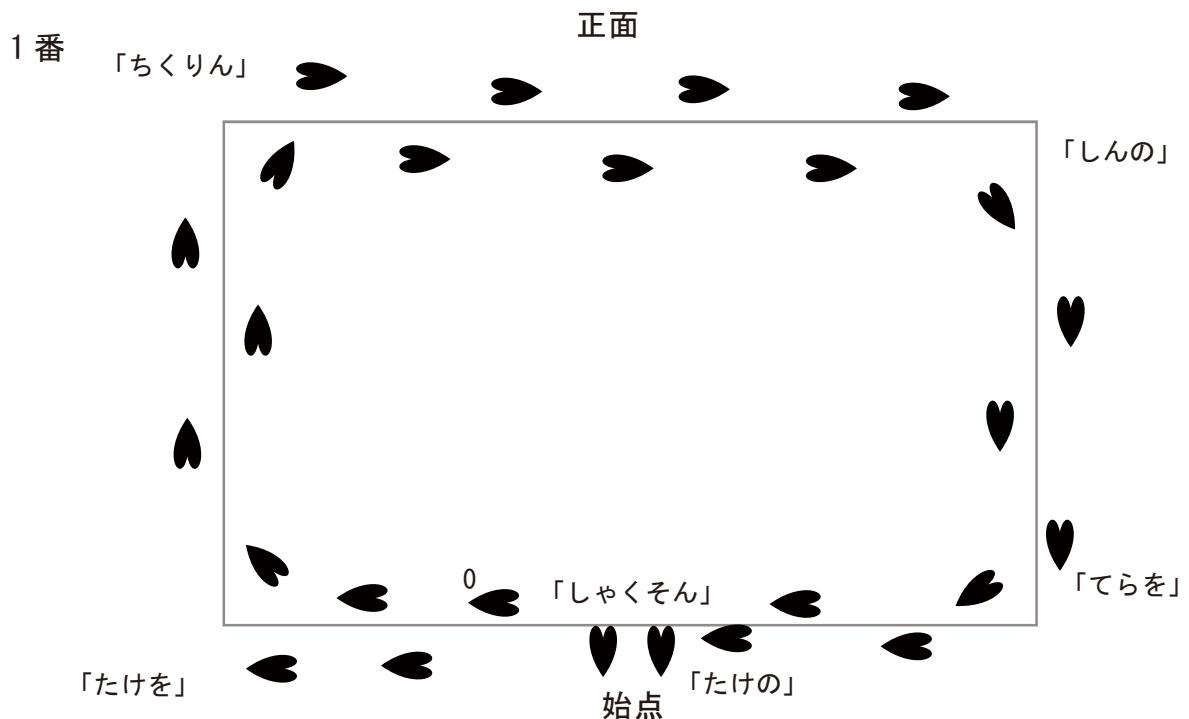
8番

正面

4  
3  
2  
1  
5  
6  
7 始点  
8 終点

図6 さらさらの舞の演技 7番、8番

## 扇の舞



※ 数字は便宜的に付けた足の位置（歩を進める順番）

図7 扇の舞の演技 1番

扇の舞  
2番

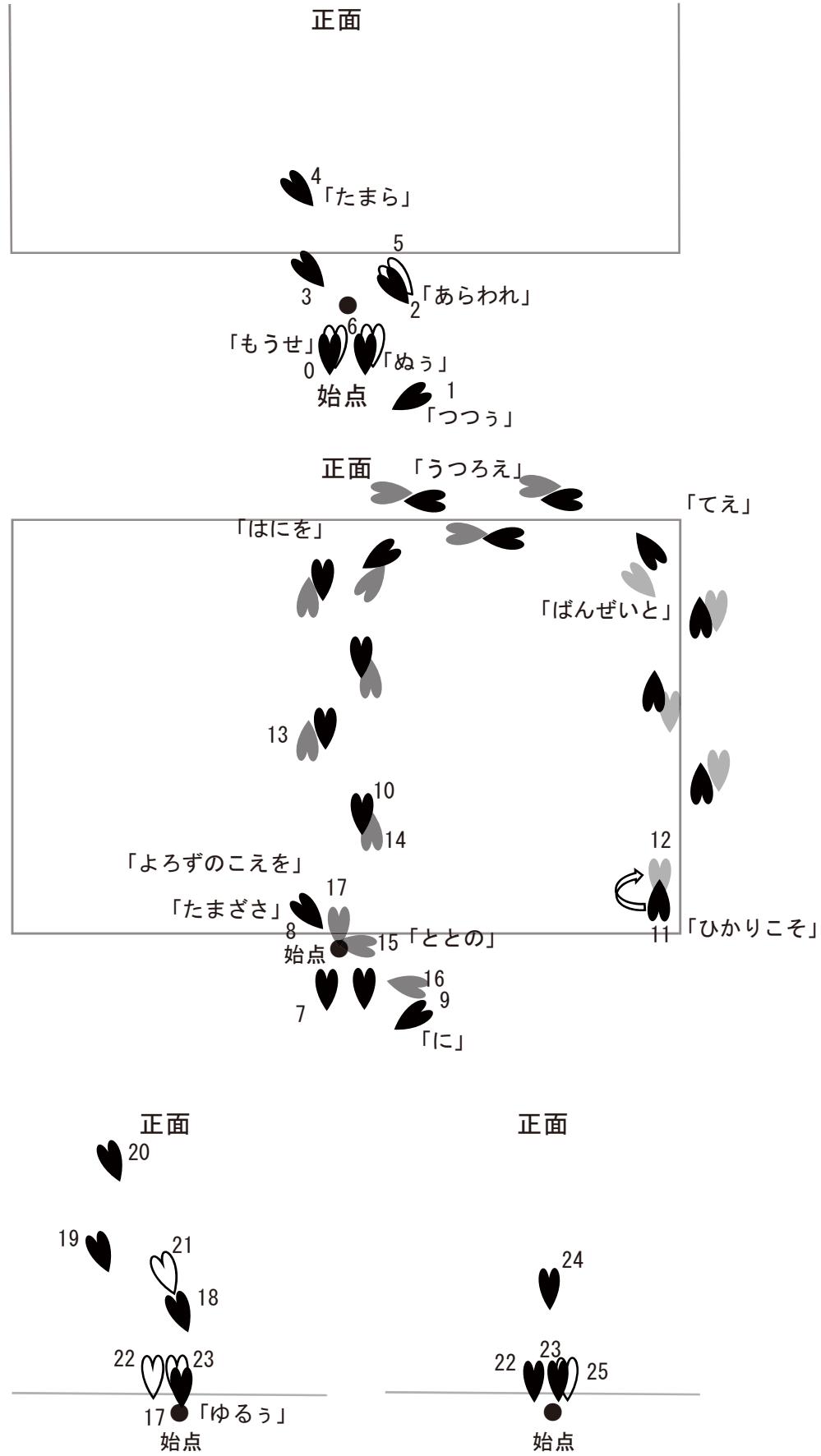
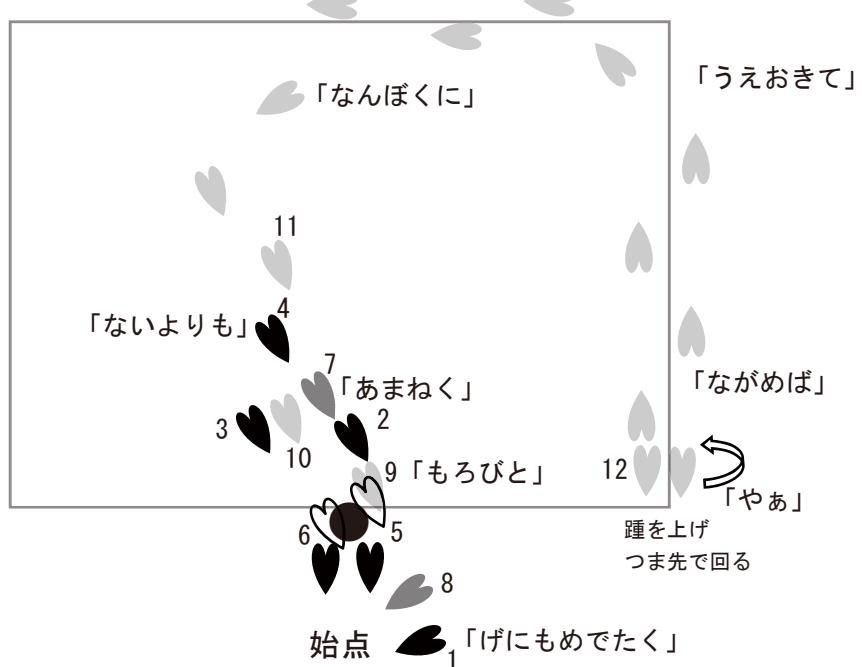


図8 扇の舞の演技 2番

扇の舞  
3番

正面



扇の舞  
3番

正面

「みどりの」



17



「いつも」

終点



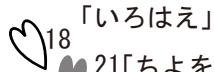
14「たけの」

正面

「みどりの」



17



「いろはえ」

21「ちょをかさねて」



「てえ」19

20

終点  
「たけのはやし」

図 10 扇の舞の演技 3 番

## ささらの舞



## 扇の舞



図 11 「ささらの舞」「扇の舞」の稚児の動きと型

## お御供上げの笛奏法

①

曲の始まりは太鼓から。太鼓の3拍目で笛を吹き始める。  
笛の切り替えは太鼓の2拍目でおこなう。

	7	6	5	4	3	2	1	
太鼓 2 拍目	1 ●	2 ●	3 ○	4 ○	5 ○	6 ○	7 ○	オー
太鼓 2 拍目 v	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ○	7 ○	8 ○	ヒヤー
	4 ●	5 ●	6 ○	7 ○	8 ○	9 ○	10 ○	ウラー

②

曲の間は太鼓3拍目で吹き出す。

	7	6	5	4	3	2	1	
太鼓 2 拍目	1 ●	2 ●	3 ○	4 ○	5 ○	6 ○	7 ○	ヒヤー
太鼓 2 拍目 v	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ○	7 ○	8 ○	リ一
太鼓 2 拍目	4 ●	5 ●	6 ○	7 ○	8 ○	9 ○	10 ○	リ一
	5 ●	6 ●	7 ○	8 ○	9 ○	10 ○	11 ○	ヤー

③

曲の間は太鼓3拍目で吹き出す。

	7	6	5	4	3	2	1	
太鼓 2 拍目	1 ●	2 ●	3 ○	4 ○	5 ○	6 ○	7 ○	オー
太鼓 2 拍目 v	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ○	7 ○	8 ○	ヒヤー

④

曲の間は太鼓3拍目で吹き出す。

	7	6	5	4	3	2	1	
太鼓 2 拍目	1 ●	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ○	7 ○	ト一
太鼓 2 拍目 v	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ●	7 ○	8 ○	ロ一

⑤

曲の間は太鼓3拍目で吹き出す。

	7	6	5	4	3	2	1	
太鼓 4 拍目	1 ○	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ○	7 ○	ロ一
	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ●	7 ○	8 ○	ト一

⑥

曲の間は太鼓3拍目で吹き出す。

	7	6	5	4	3	2	1	
太鼓 2 拍目	1 ●	2 ●	3 ●	4 ○	5 ○	6 ○	7 ○	ト一
太鼓 2 拍目 v	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ○	7 ○	8 ○	ル一
太鼓 2 拍目	3 ●	4 ●	5 ●	6 ●	7 ○	8 ○	9 ○	タ一
太鼓 1 拍目	4 ●	5 ●	6 ●	7 ●	8 ○	9 ○	10 ○	ル一
太鼓 1 拍目	5 ●	6 ●	7 ●	8 ●	9 ●	10 ○	11 ○	イ一
太鼓 1 拍目 v	6 ●	7 ●	8 ●	9 ●	10 ●	11 ○	12 ○	ロ一

⑦

曲の間は太鼓3拍目で吹き出す。

	7	6	5	4	3	2	1	
太鼓 2 拍目	1 ●	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ○	7 ○	ト一
太鼓 2 拍目 v	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ●	7 ○	8 ○	ロ一

⑧

曲の間は太鼓3拍目で吹き出す。

	7	6	5	4	3	2	1	
太鼓 2 拍目	1 ○	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ○	7 ○	ロ一
太鼓 2 拍目 v	2 ●	3 ●	4 ●	5 ●	6 ●	7 ○	8 ○	ト一

⑨

曲の間は太鼓3拍目で吹き出す。

	7	6	5	4	3	2	1	
太鼓 2 拍目 v	1 ○	2 ●	3 ○	4 ●	5 ○	6 ○	7 ○	ウ一
太鼓 2 拍目	3 ○	4 ○	5 ○	6 ○	7 ○	8 ○	9 ○	ラ一
	5 ○	6 ○	7 ○	8 ○	9 ○	10 ○	11 ○	ラ一



図 12 「お御供上げ」の運指表

① 道楽の笛奏法 太鼓の音 2拍目で切り替え。

	1 2 3 4	7 6 5 4 3 2 1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	オーヒヤー <sup>トロ</sup>
②	1 2 3 4 5	7 6 5 4 3 2 1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	ヒヤー <sup>リーリーリーヴヤー</sup>
③	1 2	7 6 5 4 3 2 1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	オーヒヤー
④	1 2	7 6 5 4 3 2 1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	トロ
⑤	1 2 3 4	7 6 5 4 3 2 1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	トロルロ
	7 6 5 4 3 2 1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	( )	( )

ささらの舞の笛奏法

三番太鼓の音 1拍目で切り替え。  
4番から道楽の曲と同じ太鼓の音 2拍目で切り替え  
平成 29 年 7 月から新しい指の押さえ方

①	1 2 3 4 5 6 7	7 6 5 4 3 2 1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	オーヒヤー <sup>トロオヒヤーリー</sup>
②	1 2 3 4 5 6 7	7 6 5 4 3 2 1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	オーヒヤー <sup>トロオヒヤーリー</sup>
③	1 2 3 4 5 6 7	7 6 5 4 3 2 1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	ヒヤー <sup>トロオヒヤーリー</sup>
	7 6 5 4 3 2 1	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○	( )	( )

図 13 「道楽」「ささらの舞」の運指表



図 14 神幸祭 お下り 大町交差点東側 隊列合流前



図 15 神幸祭 お下り 大町交差点東側 隊列合流時



図 16 神幸祭 お下り 大町交差点西側 「道楽」の演奏



図 17 神幸祭 お下り 大町交差点西側



図 18 神幸祭 お下り 大町交差点西側 「道楽」の演奏

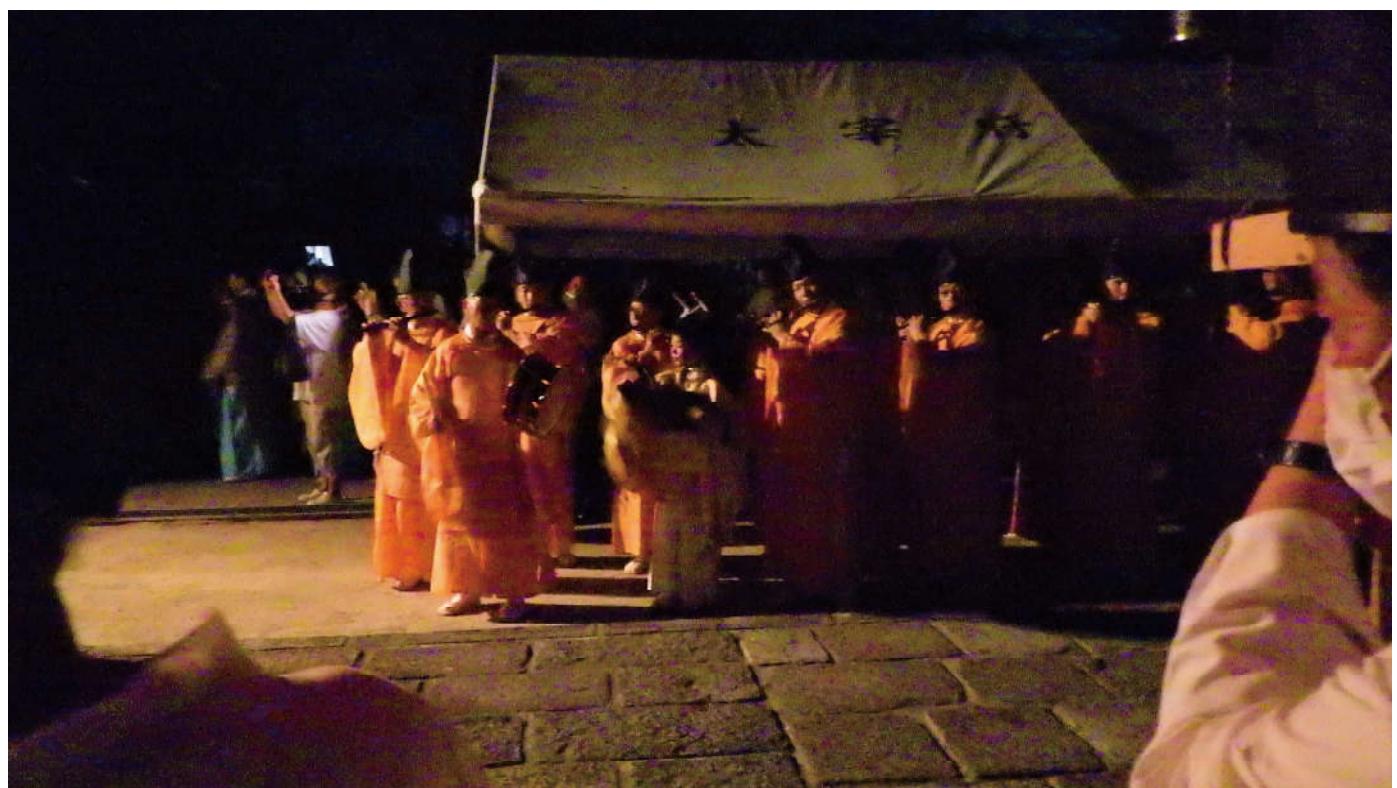


図 19 神幸祭 お下り 榎社境内 「道楽」の演奏



図 20 神幸祭 お上り 榎社東側 「道楽」の演奏



図 21 神幸祭 お上り どんかん道での供奉



図 22 神幸祭 お上り 五条交差点南側での「道楽」演奏



図 23 神幸祭 お上り 五条交差点北側安武前での御接待



図 24 神幸祭 お上り 新町での供奉



図 25 神幸祭 お上り 大町交差点東側での「道楽」演奏



図 26 神幸祭 お上り 参道一の鳥居での供奉



図 27 神幸祭 お上り 参道一の鳥居での「道楽」演奏



図 28 神幸祭 お上り 定遠館での衣装替え



図 29 神幸祭 お上り 浮殿前での「お御供上げ」奉納



図 30 神幸祭 お上り 本殿前での「稚児舞」奉納



図 31 神幸祭 お上り 本殿前での「ささら舞」奉納



図 32 神幸祭 お上り 本殿前での「ささら舞」奉納



図 33 神幸祭 お上り 本殿前での「扇舞」奉納



図34 衣装 楽人と稚児（2015年）



図35 衣装 楽人（前後）



図 36 衣装 稚児（前）



図 37 衣装 稚児（後）



図 38 衣装 稚児（ゴザ袴着付け状況）



図 39 衣装 稚児（ゴザ袴着付け状況）



図 40 楽器 ささら 1 (大)

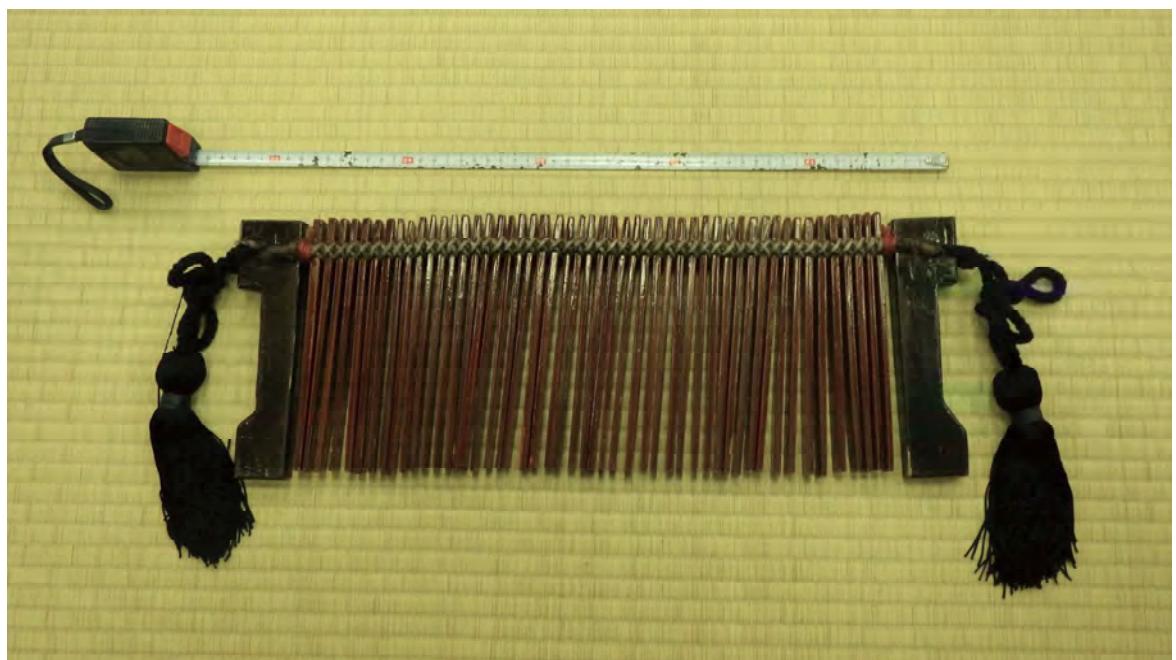


図 41 楽器 ささら 2 (小)



図 42 楽器 ささら 2 (小) と鳴り子と握り手 (親木)



図 43 楽器 ささらの染色した麻紐

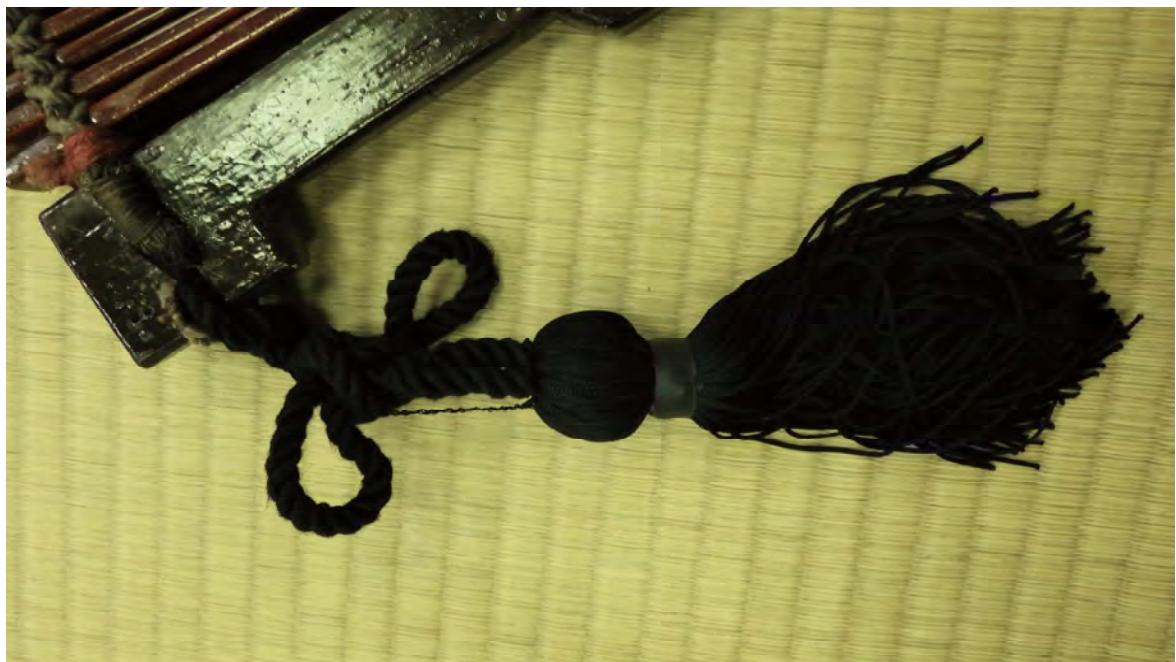


図 44 楽器 ささら 2 (房部分)



図 45 楽器 ささら 2 (上面)

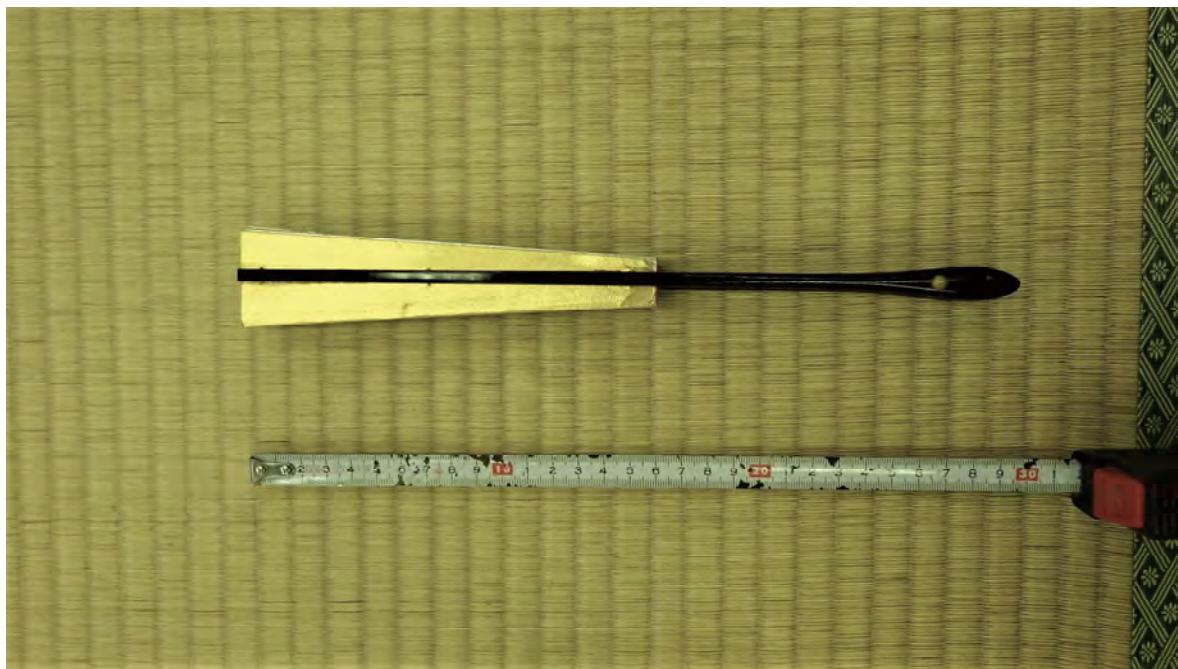


図 46 道具 扇（畳んだ状態 金面）



図 47 道具 扇（拡げた状態 銀面）



図 48 楽器 締太鼓（新旧）



図 49 楽器 締太鼓（旧 皮面）



図 50 楽器 締太鼓（旧 胴部文字部分）



図 51 楽器 締太鼓（新調 胴部文様部分）



図 52 楽器 締太鼓（太宰府天満宮所蔵分 画像提供 竹の曲保存会）

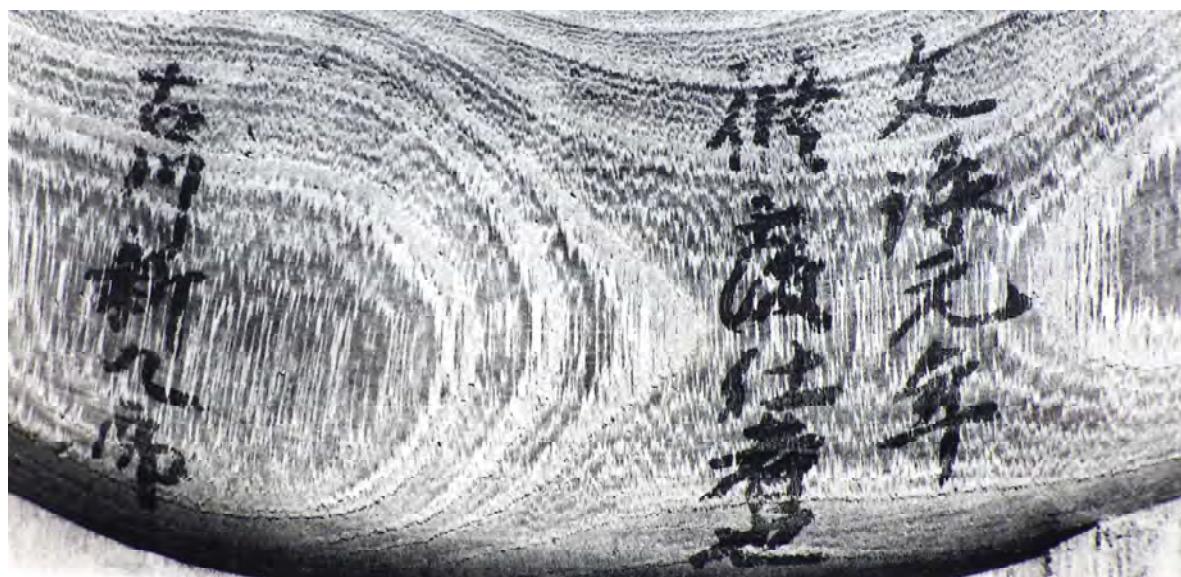


図 53 楽器 締太鼓（太宰府天満宮所蔵分内面墨書）

画像は『図録太宰府天満宮』昭和 51 年太宰府天満宮より転載



図 54 楽器 笛と製作道具（尺）

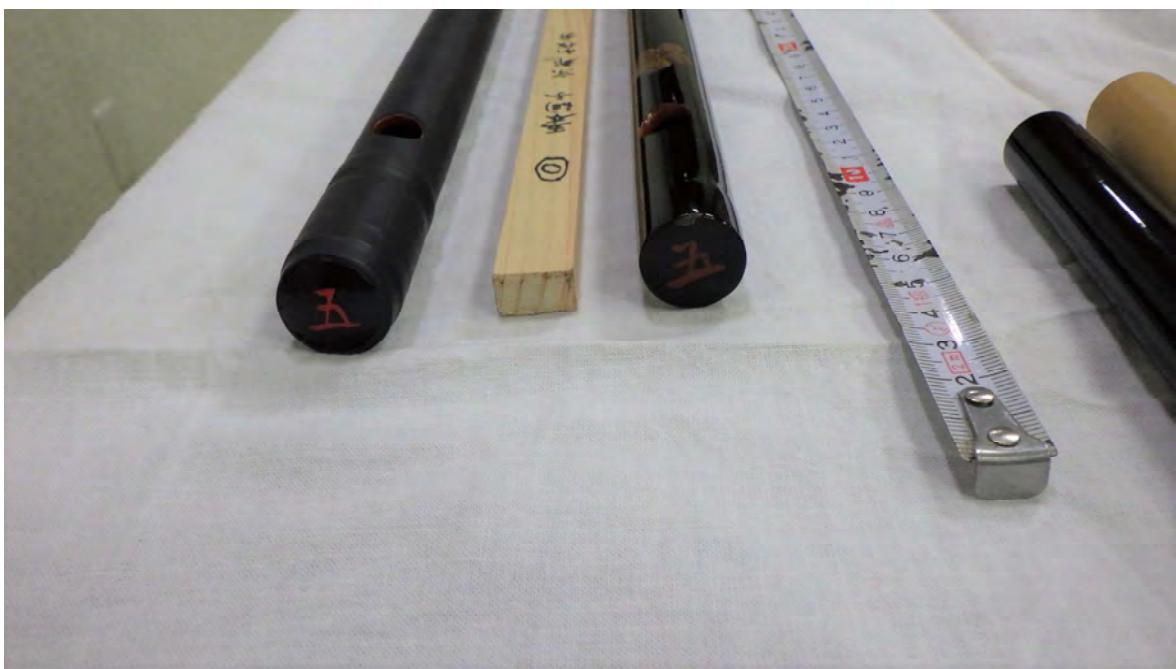


図 55 楽器 笛と製作道具（小口部分）

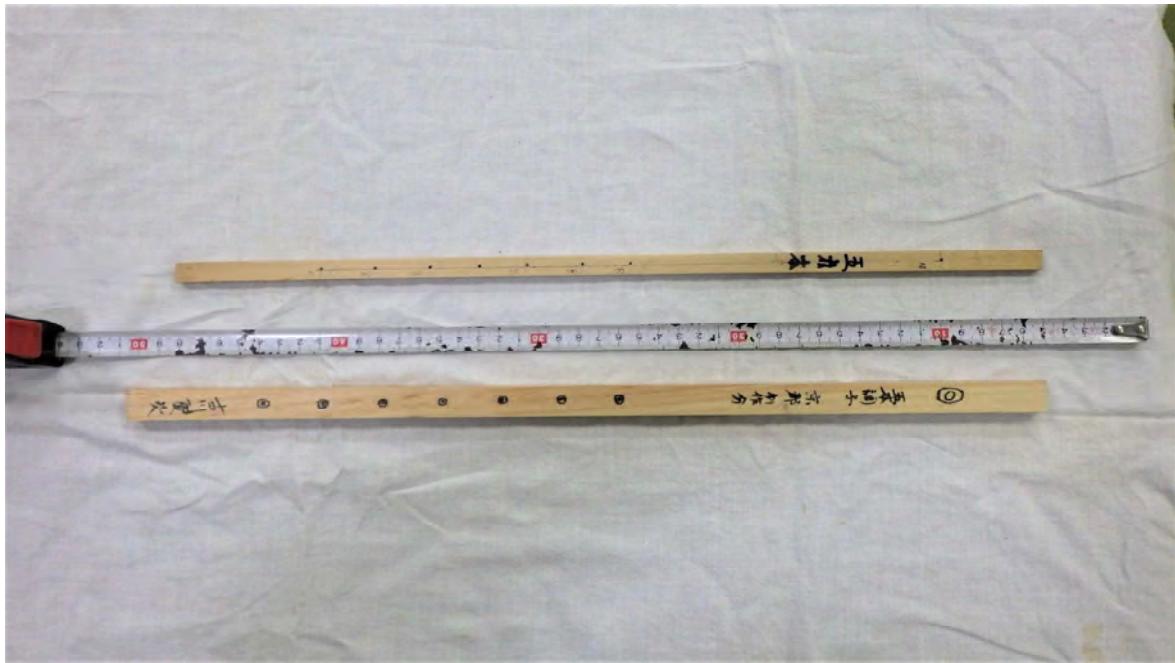


図 56 楽器 笛の製作道具（穿孔位置を記した尺）



図 57 楽器 笛の練習道具（吹き口のみ）



図 58 六座の面（太宰府天満宮所蔵 画像提供 竹の曲保存会）



図 59 六座の面納入箱蓋の墨書（太宰府天満宮所蔵 画像提供 竹の曲保存会）



図 60 『筑前名所図会』卷四 天満宮神幸の図（文政4(1821)年 福岡市博物館所蔵）

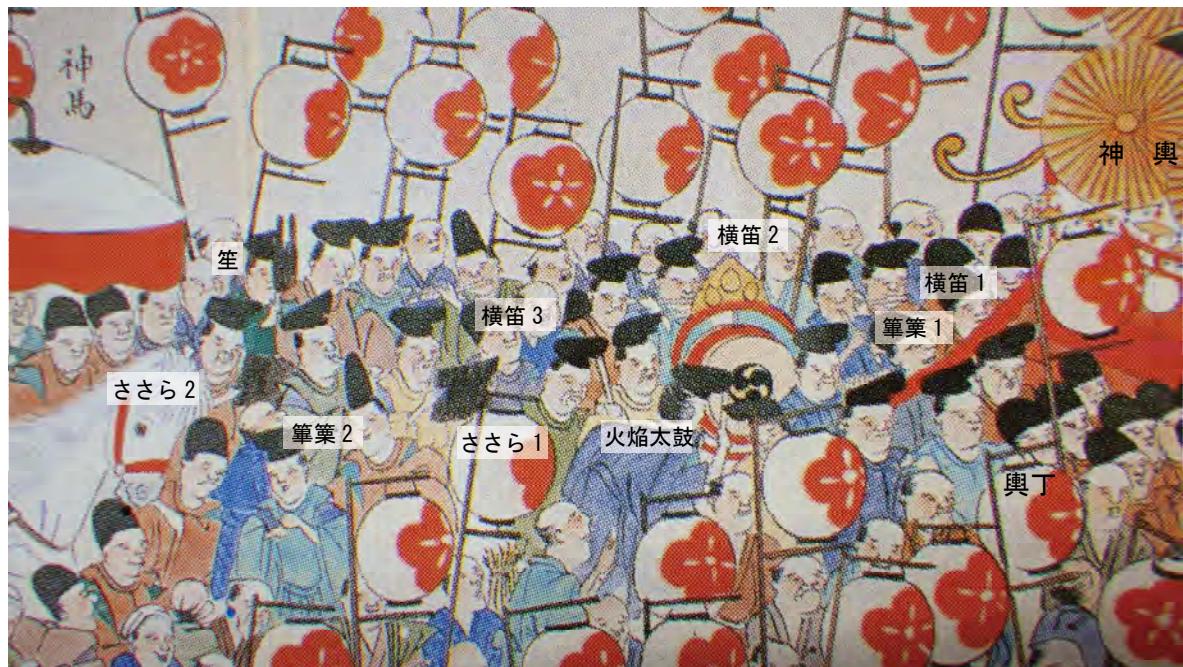


図 61 『御神幸絵巻』(嘉永本 部分 所蔵および画像提供 太宰府天満宮)



図 62 『御神幸絵巻』(元治本 部分 所蔵および画像提供 太宰府天満宮)



図 14 神幸祭 お下り 大町交差点東側 隊列合流前



図 15 神幸祭 お下り 大町交差点東側 隊列合流時



図 16 神幸祭 お下り 大町交差点西側 「道楽」の演奏



図 17 神幸祭 お下り 大町交差点西側



図 18 神幸祭 お下り 大町交差点西側 「道楽」の演奏



図 19 神幸祭 お下り 榎社境内 「道楽」の演奏



図 20 神幸祭 お上り 榎社東側 「道楽」の演奏



図 21 神幸祭 お上り どんかん道での供奉



図22 神幸祭 お上り 五条交差点南側での「道楽」演奏



図23 神幸祭 お上り 五条交差点北側安武前での御接待



図 24 神幸祭 お上り 新町での供奉



図 25 神幸祭 お上り 大町交差点東側での「道楽」演奏



図 26 神幸祭 お上り 参道一の鳥居での供奉



図 27 神幸祭 お上り 参道一の鳥居での「道楽」演奏



図 28 神幸祭 お上り 定遠館での衣装替え



図 29 神幸祭 お上り 浮殿前での「お御供上げ」奉納



図 30 神幸祭 お上り 本殿前での「稚児舞」奉納



図 31 神幸祭 お上り 本殿前での「ささら舞」奉納



図 32 神幸祭 お上り 本殿前での「ささら舞」奉納



図 33 神幸祭 お上り 本殿前での「扇舞」奉納



図34 衣装 楽人と稚児（2015年）



図35 衣装 楽人（前後）



図 36 衣装 稚児（前）



図 37 衣装 稚児（後）



図 38 衣装 稚児（ゴザ袴着付け状況）



図 39 衣装 稚児（ゴザ袴着付け状況）



図 40 楽器 ささら 1 (大)



図 41 楽器 ささら 2 (小)



図42 楽器 ささら2(小)と鳴り子と握り手(親木)



図43 楽器 ささらの染色した麻紐

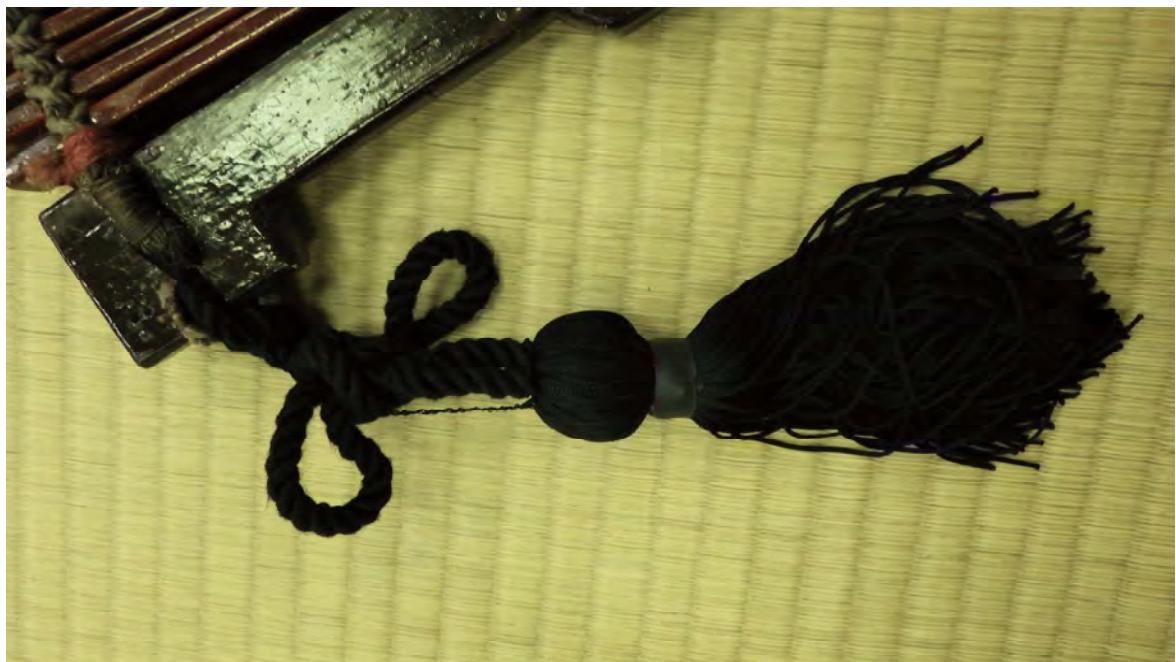


図 44 楽器 ささら 2 (房部分)



図 45 楽器 ささら 2 (上面)

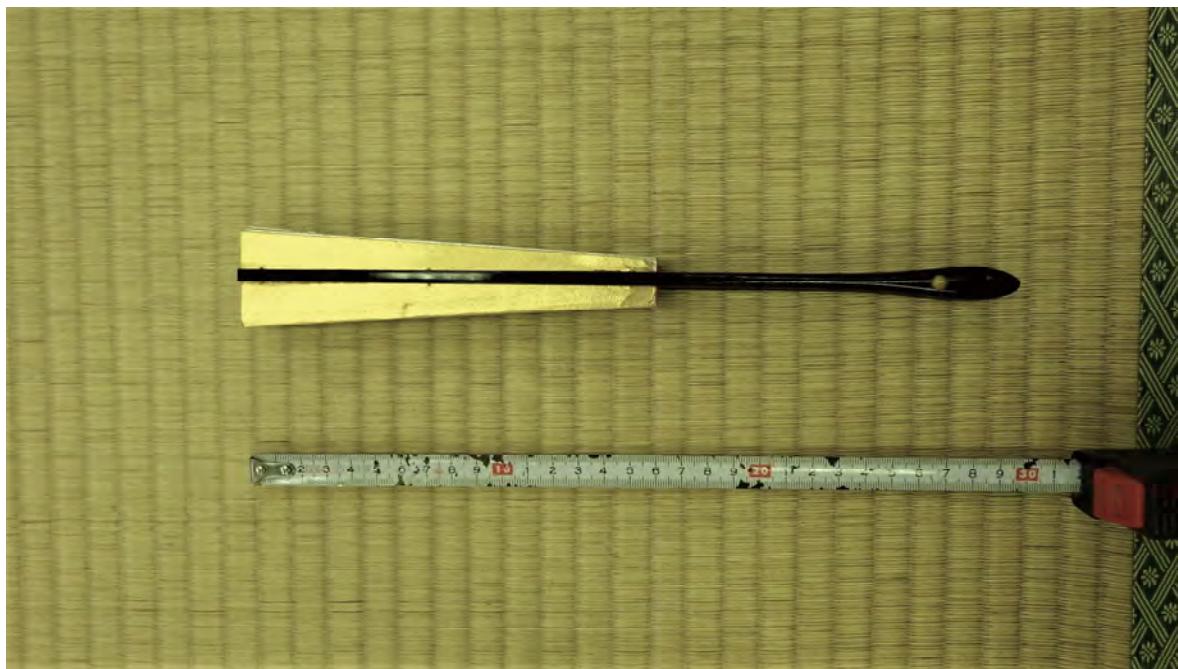


図 46 道具 扇（畳んだ状態 金面）



図 47 道具 扇（拡げた状態 銀面）



図 48 楽器 締太鼓（新旧）



図 49 楽器 締太鼓（旧 皮面）



図 50 楽器 締太鼓（旧 胴部文字部分）



図 51 楽器 締太鼓（新調 胴部文様部分）



図 52 楽器 締太鼓（太宰府天満宮所蔵分 画像提供 竹の曲保存会）

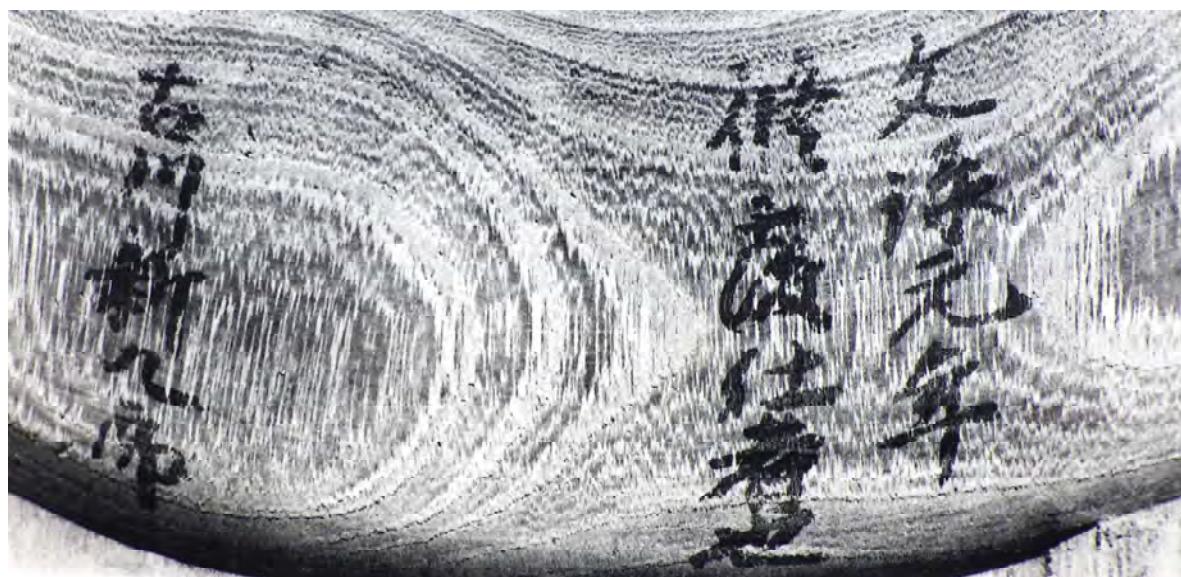


図 53 楽器 締太鼓（太宰府天満宮所蔵分内面墨書）

画像は『図録太宰府天満宮』昭和 51 年太宰府天満宮より転載



図 54 楽器 笛と製作道具（尺）

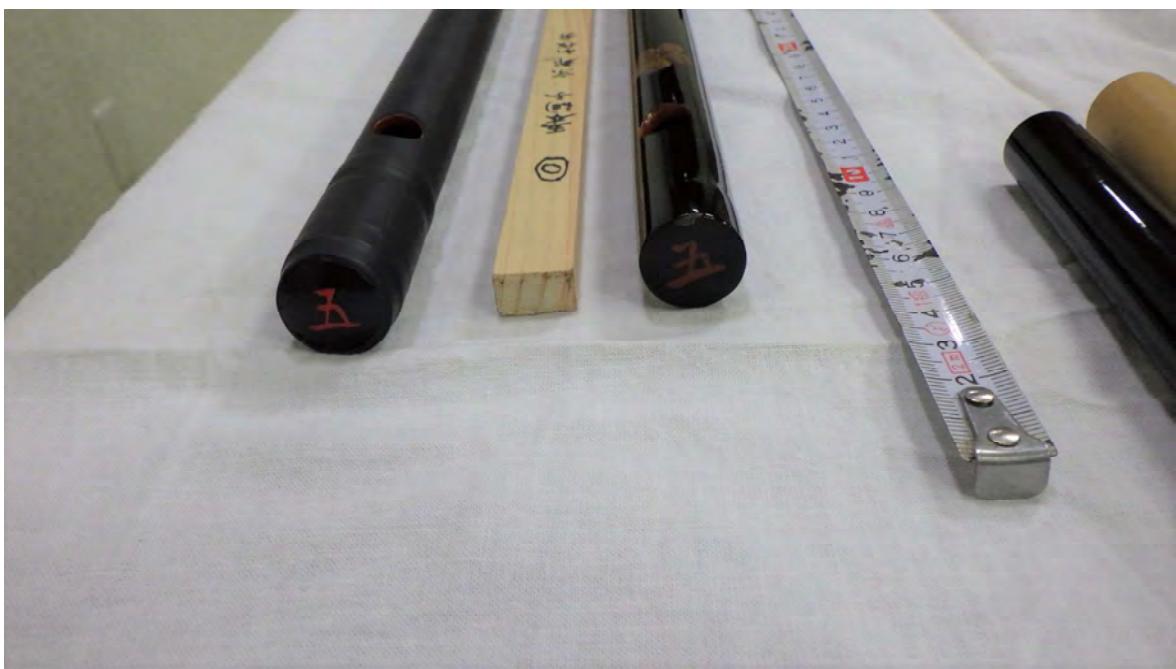


図 55 楽器 笛と製作道具（小口部分）



図 56 楽器 笛の製作道具（穿孔位置を記した尺）



図 57 楽器 笛の練習道具（吹き口のみ）



図 58 六座の面（太宰府天満宮所蔵 画像提供 竹の曲保存会）



図 59 六座の面納入箱蓋の墨書（太宰府天満宮所蔵 画像提供 竹の曲保存会）



図 60 『筑前名所図会』卷四 天満宮神幸の図（文政4(1821)年 福岡市博物館所蔵）



図 61 『御神幸絵巻』(嘉永本 部分 所蔵および画像提供 太宰府天満宮)



図 62 『御神幸絵巻』(元治本 部分 所蔵および画像提供 太宰府天満宮)